

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の契機

今回の発掘調査は、竹迫五山の1つ「青龍山 国泰寺跡」と伝わる箇所の発掘調査であった。調査原因は、個人所有地の切土による駐車場工事であったため、所有者と協議を行い埋蔵文化財包蔵地ではなかったため、試掘調査を令和元年9月5・6日に実施した。その結果、遺構が確認されたことから遺跡地図の変更を行った。また、駐車場工事を回避することは困難であったため、本調査を令和2年に実施することとなった。

第2節 調査の体制

発掘調査 (令和2年度)

調査主体 合志市教育委員会

調査責任者 中島 栄治 (教育長)

調査事務局 岩男 竜彦 (教育部長)

栗木 清智 (生涯学習課長)

山隈 和徳 (生涯学習課長補佐)

境 真奈美 (生涯学習課主幹)

調査担当者 米村 大 (生涯学習課文化財担当主査)

前田 純子 (生涯学習課文化財担当主事)

奈須 和貴 (文化財発掘調査補助員)

調査指導者 美濃口雅朗 (熊本市役所文化振興課)

調査協力者 長谷部善一 (熊本県教育庁文化課)

宮崎 敬士 (熊本県教育庁文化課)

木村 龍生 (熊本県教育庁文化課)

藤島 志考 (熊本市役所文化振興課)

岡田 有矢 (熊本市役所文化振興課)

柳田 快明 (熊本中世史研究会)

今井 豪照

発掘作業員 栗崎 強・古閑 誠也・坂本 精一・野田 誠昭・藤木 悅一・三好 茂昭・村山 國誠・森 直人・吉村 弘・福永 美代子

整理作業員 有瀬 美保

整理報告書作成 (令和3年度)

調査主体 合志市教育委員会

調査責任者 中島 栄治 (教育長)

調査事務局 岩男 竜彦 (教育部長)

飯開 輝久雄 (生涯学習課長)

山隈 和徳 (生涯学習課長補佐)

境 真奈美 (生涯学習課主幹)

調査担当者 米村 大 (生涯学習課文化財担当主査)

前田 純子 (生涯学習課文化財担当主事)

奈須 和貴 (文化財発掘調査補助員)

整理報告書作成（令和4年度）

調査主体 合志市教育委員会

調査責任者 中島 栄治（教育長）

調査事務局 岩男 竜彦（教育部長）

牧野 淳一（生涯学習課長）

山隈 和徳（生涯学習課長補佐）

遠坂 未来子（生涯学習課主幹）

調査担当者 米村 大（生涯学習課文化財担当主幹）

前田 純子（生涯学習課文化財担当主事）

奈須 和貴（文化財発掘調査補助員）

第3節 調査の経過

5月 20日～22日	表土掘削、調査区設定、包含層掘削、環境整備
5月 25日～29日	包含層掘削、トレーナー掘削、遺構検出
6月 1日～5日	包含層掘削、斜面部掘削、SX01 掘削
6月 8日～12日	I・II層掘削、SX01・03 サブトレーナー設定、メッシュ杭設置
6月 15日～19日	II層掘削、SX01・SK01 掘削、SX03 写真測量
6月 22日～24日	SX01・03 サブトレーナー掘削、SX01 検出写真撮影及び写真測量、SX01 移設
7月 1日～3日	SX01・03・SK02 サブトレーナー設定、SX02 掘削、SK01 完掘状況撮影、上層面遺構実測
7月 8日～10日	SX01・SX02・C4 グリッド掘削
7月 13日～17日	SX02 写真測量、SX01 掘削
7月 20日～22日	空撮（第1回）、SX01・02 掘削、SX01 石組遺構写真測量
7月 27日～31日	SK02・SX01 トレーナー掘削、SK02 土層断面実測、SK02 完掘
8月 3日～7日	下層面表土掘削、環境整備
8月 12日～14日	遺構検出、SX03 直下集石検出、環境整備
8月 17日～21日	SD01・02・SX03 直下集石掘削、ST01 半裁
8月 24日～28日	SD01・02、ST01・SK03・SX03 直下集石掘削
9月 18日～25日	SX03 直下集石・SD01・ST01・SK02 掘削、遺構検出
9月 28日～30日	ST01・02、SK02・04、SD01 掘削、南西調査区拡張
10月 1日～2日	西南壁土層断面分層、SI01 掘削
10月 5日～9日	SP04・10・SI01 掘削
10月 12日～15日	空撮（第2回）、下層面遺構実測、下層面遺構完掘写真撮影

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と環境

合志台地は、透水性が強く、雨水は地下に浸透することから、起伏の少ない傾斜の緩やかな地形である。菊池川水系である合志川は阿蘇外輪山の鞍岳を源とし、その合志川に流れ込む支流は台地を侵食する谷地形を形成している。本遺跡の北東側には、合志川の支流である塩浸川上流の苧扱（おこぎ）川が流れている。本遺跡北東側500m付近には竹迫城跡が存在し、北側に原口新城跡の一部にあたる竹迫日吉神社が近接している。竹迫日吉神社と本遺跡の間に存在する道は、「竹迫城絵図」に「犬ノ馬場等ノ古跡有」の記載がある。保育園建設に伴う原口新城跡の調査では、中世寺院に関連する遺構が確認された。また、南東側に合志小学校建設に伴う発掘調査が行われた陣ノ内遺跡がある。陣ノ内遺跡は、中世竹迫氏に関連した館跡から合志氏菩提寺であった清寿院跡に変わると推定されている。

縄文時代

本市では、旧石器時代の遺跡は発見されていない。御手洗遺跡は、縄文時代後期「御手洗式土器」の標式遺跡である。二子山石器製作遺跡（国指定史跡）では、玄武岩質安山岩を母岩として打製石器を製作した痕跡が良好に遺存する。須屋城跡発掘調査では、曾畠式土器に先行する野口式と考えられる土器群が出土している。

弥生時代

本遺跡周辺には、弥生時代中期～後期の集落があったと考えられる陣ノ内遺跡・宮ノ前遺跡や「S」字文鏡が出土した木瀬遺跡が分布している。弥生時代後期の甕棺より南海産のゴホウラ製腕輪が出土した御領遺跡もある。塩浸川下流域の高木原台地の発掘調査では、弥生時代後期の竪穴建物跡が石立遺跡4軒、八反田遺跡15軒、八反畠遺跡5軒、八反原遺跡53軒が確認された。また、石立遺跡で3重の円弧を描く溝が検出され、八反畠遺跡では、延長約70mの溝が検出され、環濠集落の可能性が考えられている。県内で初めて竪穴住居の発掘調査が行われた高木原遺跡でも平成30年に発掘調査が行われ、弥生時代後期の竪穴建物跡7軒が確認された。須屋付近でも弥生時代の集落が存在しており、宿の山遺跡では竪穴建物跡が検出され、また宿の山遺跡、梨ノ木遺跡からは中期の甕棺が出土している。

古墳時代

塩浸川上流域右岸には、中林古墳が造営され円墳が2基認められる。中林古墳に近い千経塚遺跡の発掘調査では、方形周溝墓6基が確認されている。

塩浸川下流域の八反原遺跡では、方形周溝墓10基、円墳19基が検出されている。4世紀後半～末頃の方形周溝墓から5世紀前半以降の円墳へ推移する。八反原遺跡2・3号墳や上生上ノ原遺跡では、九州でも初期の馬具（轡）が出土した。註1) また、上生上ノ原遺跡では三角板鋤留短甲が出土している。八反原遺跡の6基の周溝からは、殉葬馬の可能性が高い馬骨が馬具とともに出土した。以上のように、八反原遺跡を始めとする生坪塚山古墳や黒松古墳群のある合志川中流域左岸の台地周辺には、朝鮮半島の渡来文化が認められ、中央政権との強い結び付きを示している。註2) 沖田遺跡では上生上ノ原遺跡と同様、古墳時代前期の竪穴建物跡が3軒検出された。

山本郡の分立した合志郡の範囲（合志・西合志・泗水・旭志・菊陽・大津町）には、前方後円墳が分布しておらず、この地域の特色が挙げられる。

古代

貞觀元（859）年、合志郡から山本郡が分立し、肥後国は14郡になる（『日本三代実録』卷2）。『和名類聚抄』によれば合志郡は、合志郷、小川郷、山道郷、鳥嶋郷、口益郷、鳥取郷の6郷からなり比定地は諸説あり定ま

ていない。郡衙の推定地は、玉蓮寺跡及び地名「小合志」、高木原遺跡及び千束遺跡、上鶴頭遺跡、住吉日吉神社などが挙げられるが不明である。八反田遺跡、八反畠遺跡、八反原遺跡、迫原遺跡の発掘調査では、合計 163 軒の竪穴建物跡が確認されている。出土遺物は、墨書き土器や刻書き土器をはじめその他の遺物の年代から 8 世紀後半から 9 世紀前半の遺物が主体である。註3) 千束遺跡では発掘調査の結果、方形に巡る溝、掘立柱建物、蔵骨器、円面鏡、輸入陶磁器が出土している。また、熊本県教育委員会による出口遺跡、揚土遺跡、峠遺跡の発掘調査において墨書き土器が多数出土している。豊岡天神本遺跡では土師器の蔵骨器から奈良時代の唐式鏡（瑞雲双鸞八花鏡）が出土しており、郡司クラスの存在が窺える。

中世

古代の律令体制は、10 世紀初頭には崩壊し、国司が徵税請負人となり地方政治を一任された。国司は郡司や有力農民に租税を請け負わせる方式を探った結果、次第に成長した開発領主は国司と対立を深め中央の貴族や社寺に土地を寄進することで領地の支配権を確立していく。この地域に関して「天満宮託宣記」に正暦 3 (992) 年「合志荘」が大宰府安樂寺領となるとある。また、「東大寺諸荘園文書目録」に久安 4 (1142) 年、觀世音寺に關係する荘園である「竹迫別符」をみることができる。

竹迫氏は、12 世紀末に合志郡地頭職として中原親能の四男中原師員が下向すると「肥後国誌」にある。また、竹迫氏は豊後の大友、肥後の鹿子木、三池氏と同族關係として家系図にある。さらに「妙正寺文書」では、貞和年間の 14 世紀半ばに鹿子木貞基から種継に代わり、竹迫を名乗るともあり、定説をみない。

合志氏は、菊池系合志、中原系合志、佐々木系合志の 3 系統に別れるようであるが系譜を追える史料は確認できない。合志郡半郡の地頭職となった佐々木系合志は、南北朝時代に北朝方として菊池氏と対峙し、武勇の優れた合志幸隆は大友氏とともに菊池城を攻め一時、陥落させる。天正 13 (1585) 年、合志氏は島津氏に降伏し、高重は薩摩羽月で殺害されたとされる。天正 15 (1587) 年、豊臣秀吉の九州平定が行われる。

平成 17 年合志小学校新築事業に伴う陣ノ内遺跡発掘調査では、14 ~ 16 世紀の複数の堀が検出され、館跡の区画が存在したことが判明した。報告書では、文献調査なども合わせ竹迫氏の館跡から合志氏の菩提寺である清寿院跡に変遷した遺跡との位置付けを行っている。また、文献調査において竹迫城絵図の描かれた背景なども判明した。中世において稻作に適さない台地の生業に関して、大山氏は、肥後において大宰府天満宮の「御燈油料所」を旧合志郡内の「富納」、「片俣」にあったことを確認し、荏胡麻の栽培を背景とした油の生産が合志氏の経済力を支える一部であったことを指摘している。註4)

須屋氏については、南北朝期の興国 3 (1342) 年、菊池氏の武士起請文に須屋刑部という名がみられ、菊池氏の支配下にあったことがわかる。16 世紀に合志氏が竹迫城跡に拠点を移し、家臣の財産を整理したと考えられる巖照寺文書「社寺方并侍中坪付写」には、須屋新九郎という人物がみられることから合志氏の家臣であったことが窺える。

須屋城跡では、発掘調査の結果、現存していた L 字状の土塁の外側に幅約 3 m、深さ約 2 m の堀が南北方向に 56 m、また、東西に並行する長さ 90 m の 2 条の堀が確認された。これらの堀は、城域を T 字状に区画する。土塁の出土遺物からは、14 世紀 ~ 15 世紀頃に築造された可能性が高い。註5)

註

註 1) 桃崎 祐輔 2007 「馬具からみた中期古墳の編年」『九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会

神啓崇 2022 「九州における古墳時代中期の馬飼集落・墓」『韓日両武器・武具・馬具』第 14 回嶺南・九州合同考古学大会

註 2) 杉井 健 2010 「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会

註 3) 浦田 信智 1995 「第 7 章 山本郡の独立」『西合志町史』

註 4) 大山智美 2008 「戦国期国衆の存在形態—肥後國合志氏を素材として—」本史学第 89・90・91 合併号

註 5) 浦田 信智 2013 「須屋城跡」合志市文化財調査報告書 第 2 集



第1図 合志市遺跡地図

第1表 合志市遺跡一覧表

番号	県遺跡番号	名 称	時代	種別	所在地	備考
1	405-001	中林古墳	古墳	古墳	栄・中林	円墳2基、うち1基は勢将塚と呼ばれている。
2	405-002	中林遺跡	縄文	包蔵地	栄・中林	御領式土器
3	405-003	中林西原	弥生	包蔵地	栄・西原	千束遺跡 県調査平成3年、円面鏡出土
4	405-004	後川辺	古墳	包蔵地	栄・後川辺	権現原、南原、西原遺跡、県調査 昭和63年、野辺田式土器
5	405-005	矢ボンシ塚古墳	古墳	古墳	栄・村園	円墳
6	405-006	子東城跡	中世	城	栄・城山	
7	405-007	子経城跡	弥生・他	包蔵地	上庄・千錠塚	県調査 昭和61年
8	405-008	野付遺跡	縄文・他	包蔵地	福原・野付	押型文、黒髮式豪棺
9	405-009	医院寺跡	中世	寺社	竹迫・屋敷	古塔、一字・石巻塔
10	405-010	院内遺跡	弥生・他	集落	幾久富・陣の内	豪棺、環濠集落
11	405-011	宮の前遺跡	弥生	包蔵地	上庄・宮の前	須玖式、黒髮式土器・土師器
12	405-012	小園遺跡	縄文～弥生	包蔵地	豊岡・小園	御領式土器、石器・弥生土器
13	405-013	竹追城跡	中世	古墳	上庄・城山	中世城
14	405-014	木瀬遺跡	弥生	包蔵地	上庄・木瀬	竪穴式住居跡、S字文鏡、重弧文式土器、石包丁
15	405-015	扇空巣横穴	古墳	古墳	上庄・東谷	近世の岩窟?
16	405-016	御手洗遺跡	縄文・他	包蔵地	幾久富・乙丸	縄文後期、御手洗式土器・土師器
17	405-017	原口新城跡	中世	城	豊岡・宮の本	県調査
18	405-018	桑鶴遺跡	縄文～弥生	包蔵地	福原・出分	昭和50年園場整備、盛土で残す
19	405-019	八久保遺跡	縄文	包蔵地	竹迫・八久保	阿高式・御領式
20	405-020	竹迫宇土遺跡	縄文	包蔵地	竹迫・宇土	県調査、三万田式、弥生中期
21	405-021	群古遺跡	古代・中世	包蔵地	豊岡・群山	骨器
22	405-022	飯高古墳跡	弥生	包蔵地	福原・飯高	
23	405-023	御領遺跡	縄文・他	包蔵地	竹迫・福原	土偶・御領式土器、豪棺よりゴホウラ製貝輪
24	405-024	轟遺跡	弥生	包蔵地	竹迫・福原	押型文、黒髮式土器
25	405-025	豊岡宮本横穴群	古墳	古墳	豊岡・宮本	12基、平成16年調査
26	405-026	園泰寺跡	中世	寺社	上庄	
27	407-001	上生遺跡	弥生	埋葬	上生・北野	
28	407-002	城遺跡	古墳	包蔵地	上生・城敷	野辺田式土器・日本書記・珪石の本拠
29	407-003	沖田遺跡	縄文・他	包蔵地	野々島・沖田	丸木舟・御領式・野辺田式・土師器・石器
30	407-004	黒松岡原遺跡	縄文	集落	合生・黒松	表面に土器細片散布・石斧出土
31	407-005	黒松森の迫遺跡	弥生	包蔵地	合生・萩の迫	
32	407-006	北野原寺跡	弥生	埋葬	上生・北野	
33	407-007	聖母寺跡	中世	寺社	上生・城	
34	407-008	上原遺跡	縄文～奈良	包蔵地	上生・上原	
35	407-009	城塙遺跡	縄文～古代	包蔵地	上生・城敷	
36	407-010	積城跡	中世	城	上生・城敷	
37	407-011	城坂古墳	古墳	古墳	上生・城敷	
38	407-012	アミダメ遺跡	縄文～古代	包蔵地	野々島・前畠	
39	407-013	延寿寺遺跡	縄文～古代	包蔵地	野々島・古閑	
40	407-014	巡畠遺跡	縄文～古代	包蔵地	野々島・巡畠	
41	407-015	永田古支石墓	弥生	埋葬	野々島・永田	支石墓
42	407-016	永田石棺	古墳	埋葬	野々島・永田	
43	407-017	瀬戸古墳	古墳	古墳	野々島・瀬戸	
44	407-018	塙浸石棺	古墳	埋葬	上生・塙浸	
45	407-019	笛塙遺跡	弥生・古墳	包蔵地	上生・笛塙	市指定 笛塙古墳
46	407-020	永田古墳跡	弥生・古墳	包蔵地	野々島・永田	
47	407-021	向原遺跡	弥生・古代	包蔵地	上生・向原	
48	407-022	アシンド遺跡	弥生	包蔵地	上生・池尻	
49	407-023	岡原遺跡	縄文～古代	包蔵地	合生・岡原	
50	407-024	古原岡遺跡	弥生・古墳	包蔵地	野々島・古原	
51	407-025	城裏稻群	弥生	埋葬	上生・城	
52	407-026	中原遺跡	縄文～古墳	包蔵地	野々島・中尾原	縄文・弥生・古墳期土器片
53	407-027	黒松古墳群	古墳	古墳	合生・萩の迫	
54	407-028	生折古墳群	古墳	古墳	合生・生坪	市指定 生坪坂山古墳
55	407-029	八反田遺跡	弥生	埋葬	合生・八反田	旧西合志町調査、豪棺・壺・栉・石斧
56	407-030	立削横穴群	古墳	古墳	合生・立剣	横穴数基から成る
57	407-031	小合志古墳	古墳	古墳	合生・小合志	小合志・巨石横穴石室消滅、副葬品多数
58	407-032	弘生原遺跡	弥生・古墳	城	合生・弘生	弥生野辺田式・土師器・須恵器土器
59	407-033	迫原ハマヤ古墳	古墳	古墳	合生・迫原	円墳・箱式石棺・鉄鏹・文字ある土師器
60	407-034	江良遺跡	古墳	集落	合生・江良	野辺田式・土師器・須恵器片多数出土
61	407-035	迫原長塚古墳	古墳	古墳	合生・迫原	箱式石棺
62	407-036	高木原遺跡	縄文～奈良	包蔵地	合生・高木	縄文後期・奈良時代・出土品大量
63	407-037	合志夢跡推定地	古代	包蔵地	合生・玉蓮寺	
64	407-038	玉蓮寺跡	中世	寺社	合生・玉蓮寺	
65	407-039	弘生城跡	中世	城	合生・弘生	
66	407-040	塙口横穴群	古墳	古墳	合生・塙口	
67	407-041	八反原遺跡	弥生・古墳	集落	合生・弘生	旧西合志町
68	407-042	野々島遺跡	弥生・他	包蔵地	野々島・北	畠地・弥生・野辺田式土器・土師器
69	407-043	八反畠遺跡	縄文～弥生	包蔵地	野々島・八反畠	旧西合志町調査、豪棺・壺・栉・石斧
70	407-044	ヲタゴ塚古墳	古墳	古墳	野々島・天神免	円墳
71	407-045	枇杷田遺跡	縄文	包蔵地	野々島・中原	縄文早期
72	407-046	野田原寺跡	縄文・古墳	包蔵地	野々島・中原	御領式土器・古式勾玉・野辺田式・須恵器
73	407-047	野々島古支石墓	中世	包蔵地	野々島・八通丸	八通丸
74	407-048	花園古墳跡	弥生～古代	包蔵地	野々島・花園屋敷	
75	407-049	野田原遺跡	弥生・古墳	包蔵地	野々島・芝原	
76	407-050	駄飼場遺跡	古代	包蔵地	野々島・駄飼場	
77	407-051	井天山盤座遺跡	古代	祭祀	野々島・野々島	
78	407-052	愛樂寺跡	中世	寺社	野々島・外園	
79	407-053	花園山跡	中世	包蔵地	野々島・花園屋敷	
80	407-054	二子山石器製作遺跡	縄文	包蔵地	野々島・天神免	石器各種・原石
81	407-055	中原古石墓	弥生	埋葬	野々島・中原	
82	407-056	丸の山遺跡	縄文	包蔵地	野々島・丸内	
83	407-057	琵土遺跡	縄文	包蔵地	御代志・大池	
84	407-058	小合志原遺跡	縄文	包蔵地	合生・辻久保	
85	407-059	辻久保遺跡	縄文	包蔵地	合生・辻久保	
86	407-060	若原石棺	古墳	埋葬	野々島・若原	石棺群あり
87	407-061	中野遺跡	縄文～古代	包蔵地	野々島・中野	
88	407-062	木原野遺跡A・B	縄文	包蔵地	野々島・沖野	石鎧
89	407-063	宿山古墳跡	弥生	埋葬	須屋・宿の山	弥生合口豪棺・土師器片一括
90	407-064	梨の木遺跡	縄文	包蔵地	須屋・梨ノ木	
91	407-065	向島遺跡	縄文	包蔵地	須屋・向島	
92	407-066	須原城跡	縄文・古墳・古代・中世	城	須屋・下屋敷	合志市調査 中世城跡
93	407-067	妙法寺跡	中世	寺社	須屋・宿の山	骨蔵器出土
94	407-068	又レ觀音古墳	古墳	古墳	合生・鬼塚	
95	407-069	巡畠遺跡	弥生・古墳	包蔵地	野々島・巡畠	
96	407-070	船入遺跡	縄文・中世	館	須屋・船入	県調査 平成13年
97	407-071	荻原横穴群	古墳	古墳	合生・萩原	旧西合志町調査
98	405-027	豆ヶ原遺跡群	縄文	包蔵地	上庄・豆ヶ原	県調査 平成元年
99	405-028	上庄遺跡	古代	包蔵地	上庄・上庄	県調査 平成元年
100	405-029	桜山古墳	古代	包蔵地	上庄・桜山	骨器
101	405-030	崎遺跡	古代	集落	上庄・崎	県調査 平成3年 墓石器
102	405-031	出口遺跡	古代	集落	上庄・出口	県調査 平成3年 墓石器
103	405-032	揖土遺跡	古代	集落	上庄・揖土	県調査 平成3年 墓石器
104	405-033	臼野遺跡	縄文	包蔵地	上庄・臼野	縄文晚期
105	405-034	天神古遺跡	古代	埋葬	豊岡・天神本	不時奉見・骨蔵器より火葬骨・唐式鏡出土
106	405-035	今町遺跡	中世	埋葬	幾久富・今町	旧合志町役場跡、現町営住宅付近
107	405-036	寺崎城跡	中世	城	上庄・寺崎	中世城跡の可能性
108	407-028-1	空坪塙山古墳	古墳	古墳	合生・漆崎	
109		蛇尾城跡	弥生・中世	包蔵地	上庄・東谷	堅穴式住居跡、中世城の可能性
110		虚空藏さん	近世	祭祀	上庄・東谷	
111		竹追城壁構え跡	中世	城	上庄・竹追	

第Ⅲ章 調査とその成果

第1節 遺跡の概要

調査地は、合志市上庄字宮ノ前に位置し北東に原口新城跡の一部にあたる竹迫日吉神社が近接しており、南東側に平成17年の合志小学校建設に伴う発掘調査が行われた陣ノ内遺跡がある。陣ノ内遺跡は、中世竹迫氏の館跡と推定されている。調査地は、道路より約3mの高さにあり、周辺は既に削平されている。調査では上層面と下層面における2面の検出面を確認できた。上層面の検出面であるⅡ層では、中世の時期における遺構が検出された。竹根が多く、土層を把握することは困難であった。下層面の検出面であるⅥ層では、弥生時代後期の遺構と中世の時期における遺構が混在して確認された。検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴建物跡1基、溝状遺構1条、中世の溝1条、基壇状遺構2基のうち1基は、中世墓と考えられる。また、板碑が設置された遺構が確認された。

第2節 遺跡の層位

基本土層は、表土下にⅠ層からⅧ層を設定した。Ⅱ層は、中世の基壇状遺構のSX02と板碑を伴う遺構のSX03の基盤層である。Ⅲ層は、SK02の検出面に相当する。Ⅳ層は、中世の溝を埋めており、整地層と考えている。Ⅴ層は、中世の溝であるSD01と弥生時代の溝であるSD02の検出面に相当する。Ⅵ層は、黒褐色粘質土が約30cm堆積しており、この層を細分しⅦ層を設けた。Ⅶ層はクロニガ、Ⅷ層はニガシロである。

第3節 調査の成果

[1] 繩文時代～弥生時代の遺構

SK04（第7図）

調査区北東のC3グリッドに位置する土坑で、直径0.50m、深さ0.125mを測る。プランは円形を呈しており、埋土からは外面に煤が付着した縄文時代晚期の深鉢胴部片が出土した。当初は埋甕を想定していたが、出土状況から埋甕ではなく、性格は不明である。

SK06（第7図）

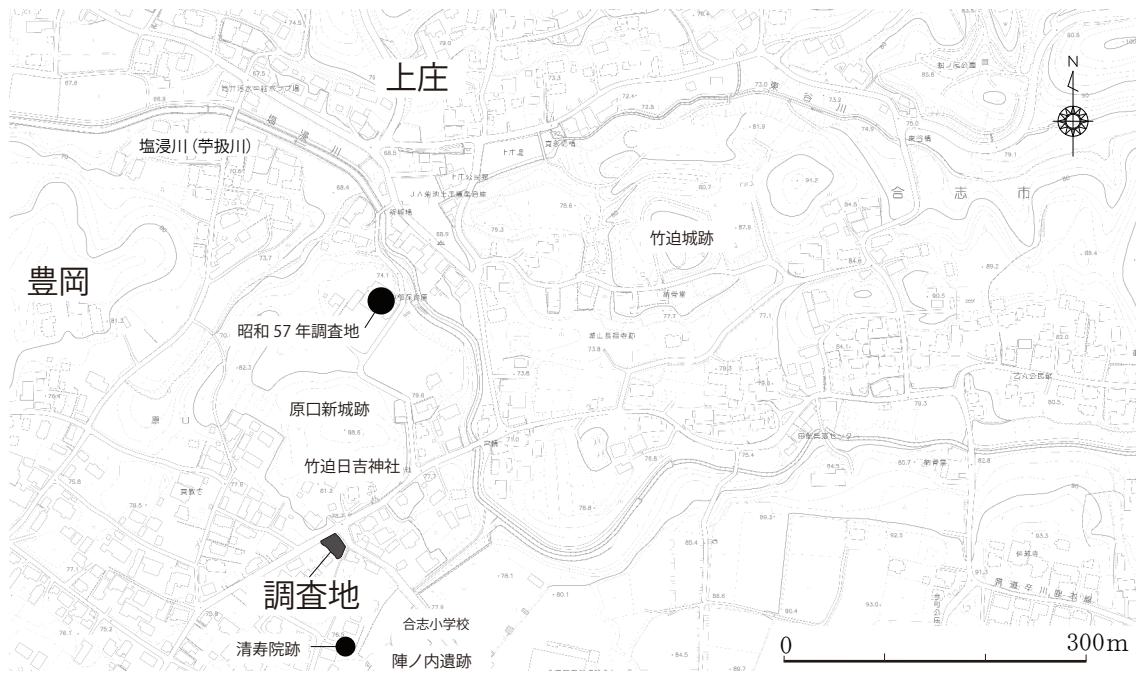
調査区北東のC3グリッドに位置する土坑であり、プランは円形を呈し、断面形状はテラスが付く。規模は、直径0.70m、深さ0.34mを測る。埋土からは、弥生土器の甕または壺の胴部片が出土した。

SD02（第7図）

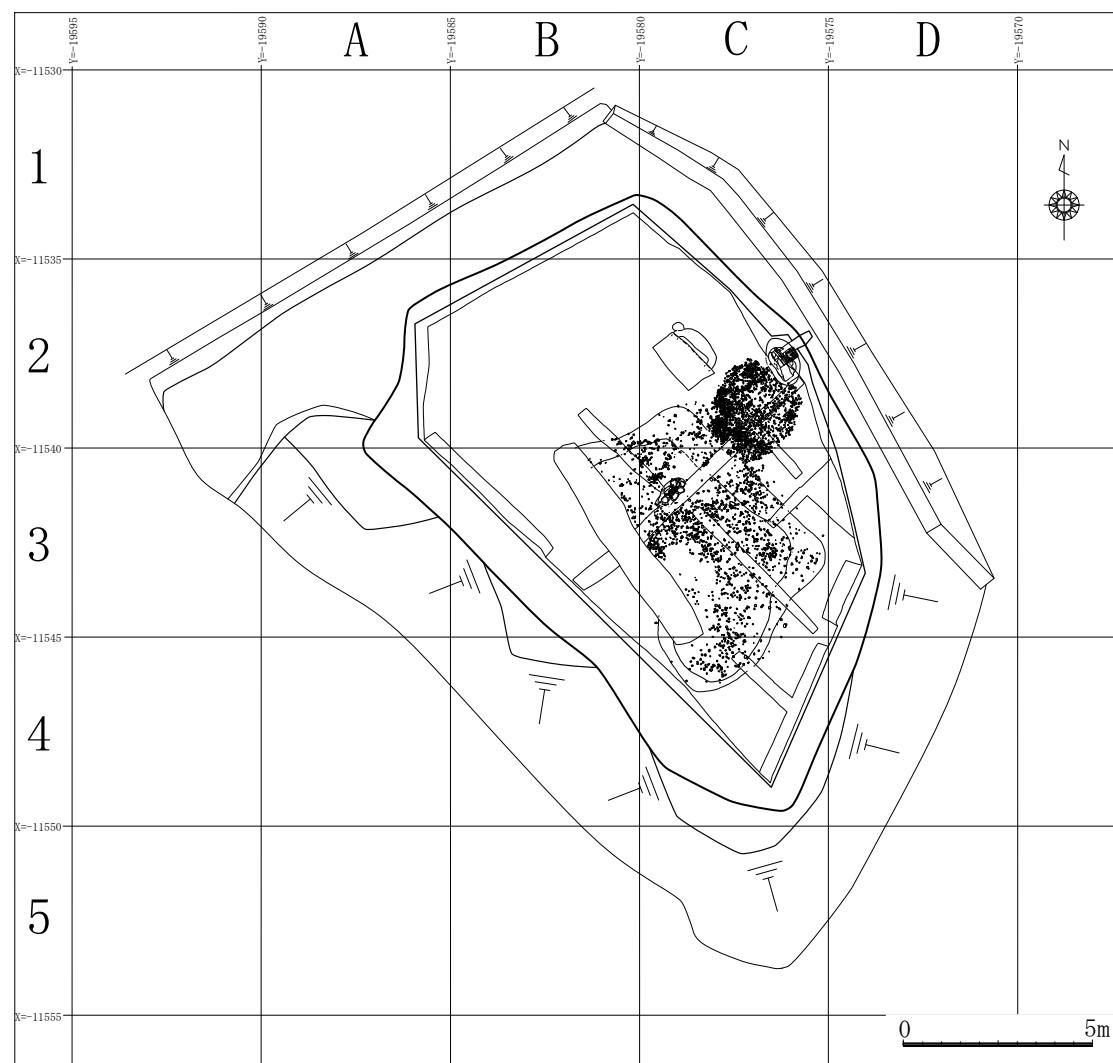
調査区北西端のA2・B1・B2・C1・C2グリッドに位置する溝状遺構である。調査区端で検出されたため全体は不明であるが残存する規模は、長さ約8.5m、幅約2.3m、基底部から最も深い部分の深さ約1.4mを測る。基底部は段付きの「V」字状を呈しており、段をもつ形状である。検出面はV層である。土層堆積状況は、基底部の⑬～⑯層の埋土はクロニガ（Ⅶ層）、ニガシロ（Ⅷ層）が主体であることから自然堆積層であると判断できる。また、⑥～⑪層の堆積は、⑧層まで埋没した段階で再度掘削している可能性を示す。埋土からは、弥生土器、磨製石斧、鉄鎌が出土した。

SD03（第7図）

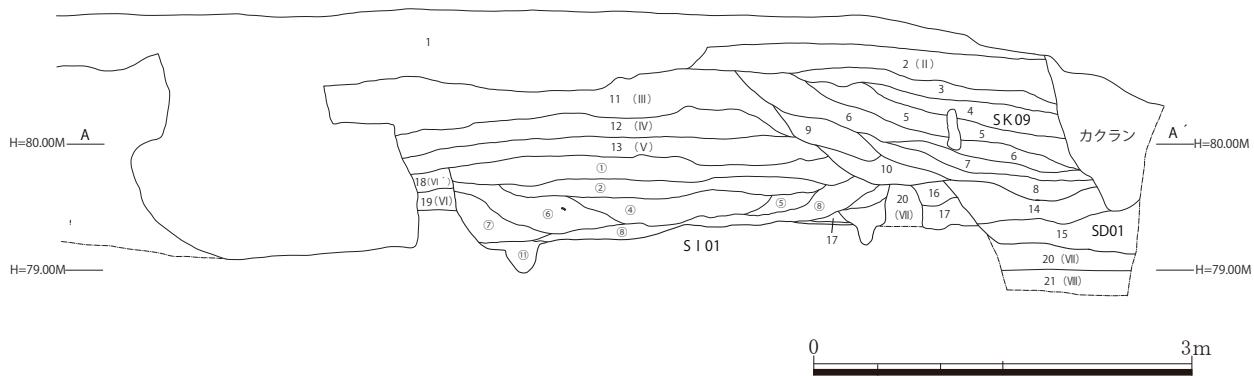
調査区西側のA2・B2グリッドに位置する溝状遺構である。規模は、長さ約6.5m、幅約0.7m、深さ約0.2mを測り、基底部は「U」字状を呈している。遺物は弥生土器の小片が出土した。切り合い関係から、SD03はSD02より先行する。遺物は弥生土器の小片が出土した。



第2図 調査地周辺図 (S=1/7500)



第3図 グリッド配置図 (S=1/200)



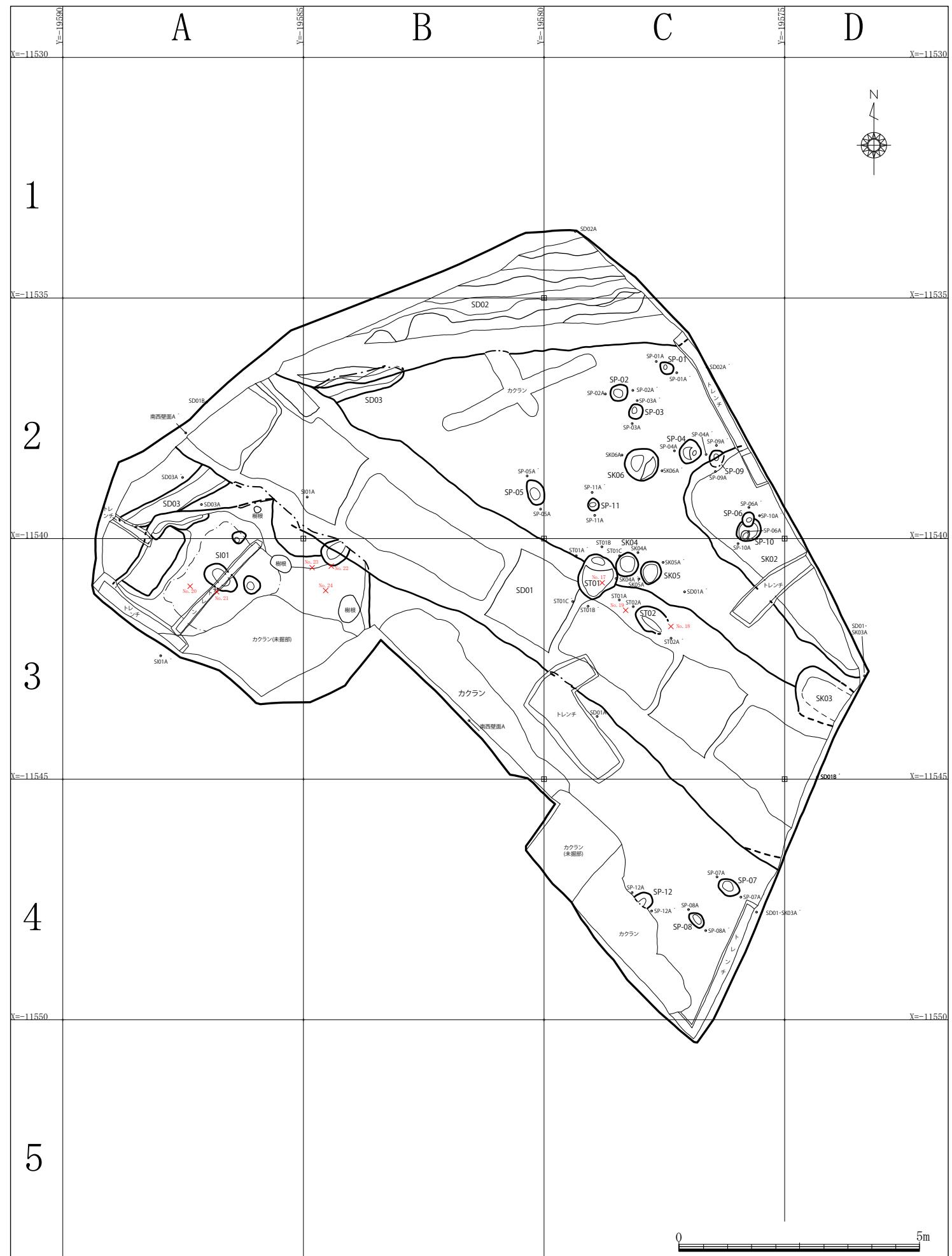
南西壁面土層注記

- 1 10YR 黒褐 2/2 カクラン
- 2 7.5YR 黒褐 3/2 II層に対応。
- 3 7.5YR 極暗褐 2/3 しまりはある。やや粘質。1cm程度のブロック状のクロニガを少量含む。(SK09)
- 4 7.5YR 極暗褐 2/3 しまりはある。やや粘質。0.1~0.2cmの黄褐色粒を少量含む。2~5cmのブロック状のクロニガを多く含む。(SK09)
- 5 7.5YR 極暗褐 2/3 しまりはある。やや粘質。1~5cmのブロック状のクロニガを少量含む。(SK09)
- 6 7.5YR 黒褐 3/2 しまりはある。やや粘質。1~5cmのブロック状のクロニガを少量含む。(SK09)
- 7 7.5YR 黒褐 3/2 しまりはある。やや粘質。1~5cmのブロック状のクロニガを多く含み、0.1cm程度の黄褐色粒を少量含む。(SK09)
- 8 7.5YR 暗褐色 3/3 しまりは強い。やや粘質。1cm程度のブロック状のクロニガと0.1cm程度の黄褐色粒を少量含む。(SK09)
- 9 7.5YR 黒褐 3/2 しまりはある。やや粘質。0.1~0.2cmの橙色粒と黄褐色粒を少量含む。(SK09)
- 10 7.5YR 黒褐 3/2 しまりはやや強い。3~4cmのブロック状のクロニガを少量含む。0.1cm程度の黄褐色粒を微量含む。(SK09)
- 11 7.5YR 黒褐 2/2 III層に対応。
- 12 7.5YR 暗褐 3/3 IV層に対応。
- 13 7.5YR 黒褐 2/2 V層に対応。
- 14 7.5YR 黒褐 2/2 しまりはある。やや粘質。焼土を多く含み、10~30cm程度のブロック状のクロニガを少量と0.1~0.2cmの黄褐色粒を微量含む。
- 15 7.5YR 黒褐 2/2 しまりはある。0.1~1cmの黄褐色粒と3~5cmのブロック状のクロニガを多く含む。
- 16 7.5YR 黒褐 2/2 しまりはある。やや粘質。焼土を多く含み、0.1~0.5cmの橙色粒を多く含む。
- 17 7.5YR 黒褐 2/2 しまりはある。やや粘質。30cm程度のブロック状のクロニガを含む。橙色粒は少ない。
- 18 7.5YR 黒褐 2/2 VI層に対応。
- 19 7.5YR 黒褐 2/2 VI層に対応。
- 20 7.5YR 黒褐 2/2 VII層に対応。
- 21 10YR 黄褐色 5/6 VII層に対応。

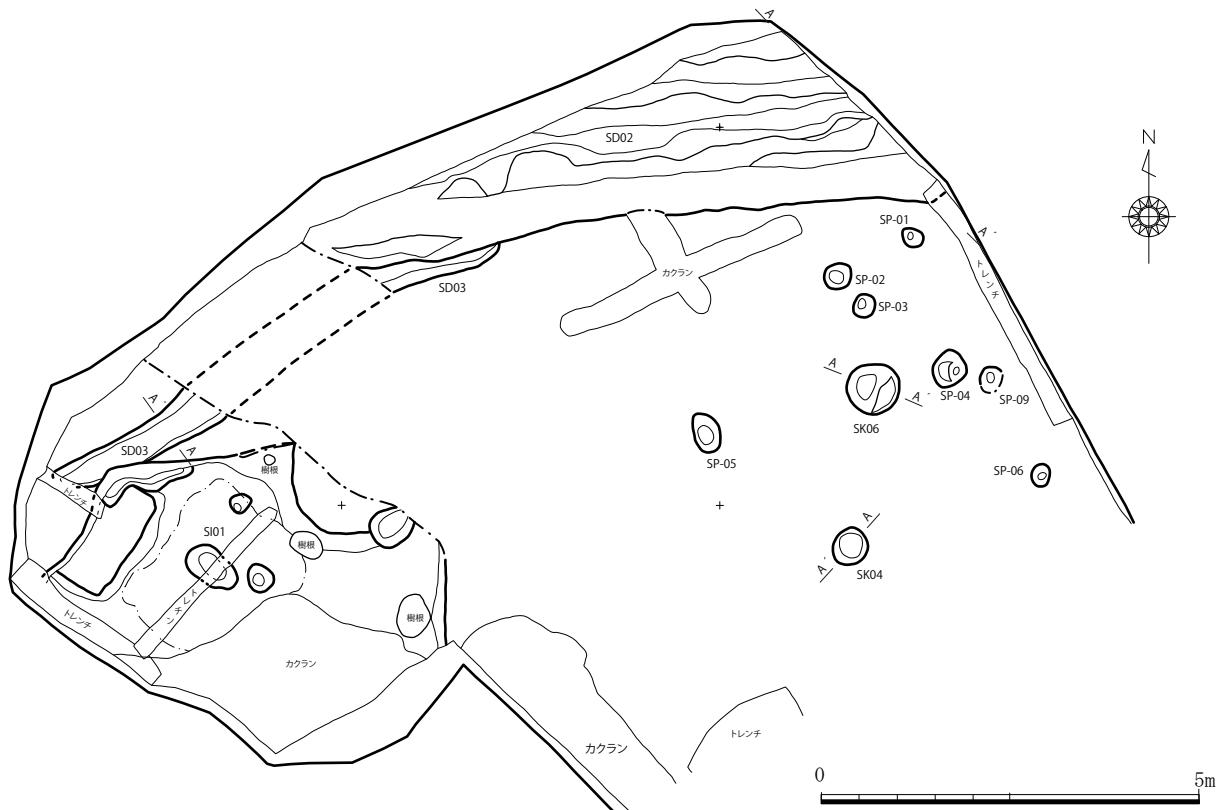
基本土層

- I層 10YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。やや粘質。
- II層 7.5YR 黒褐 3/2 しまりは弱い。やや粘質。クロニガをやや多く含む。
- III層 7.5YR 黒褐 2/2 II層よりしまりは強い。やや粘質。2~3cmのブロック状のクロニガを少量含み、0.1~0.3cmの橙色粒をやや多く含む。
- IV層 7.5YR 暗褐 3/3 III層よりしまりは強い。やや粘質。全体的にクロニガを多く含み、0.1~0.3cmの橙色粒をやや多く含む。
- V層 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは強い。やや粘質。0.1~0.3cmの橙色粒を多量含む。
- VI層 7.5YR 黒褐 2/2 しまりはある。やや粘質。2~4cmのブロック状のクロニガを少量含む。
- VII層 7.5YR 黒褐 2/2 しまりはある。やや粘質。0.1~0.2cmの橙色粒を多量含む。
- VIII層 7.5YR 黒褐 2/2 クロニガ
- VII層 10YR 黄褐 5/6 ニガシロ

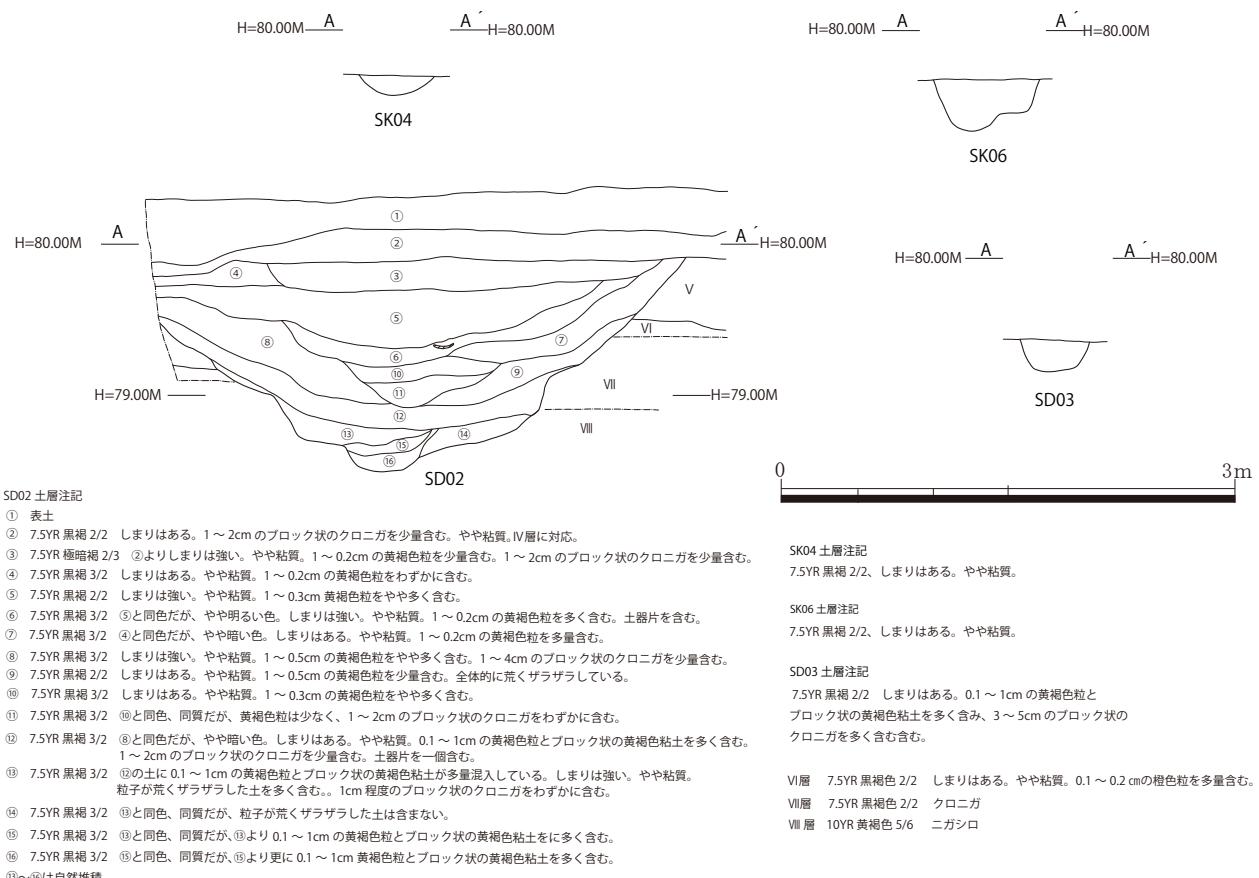
第4図 調査区南西壁面土層断面図 (S=1/60)



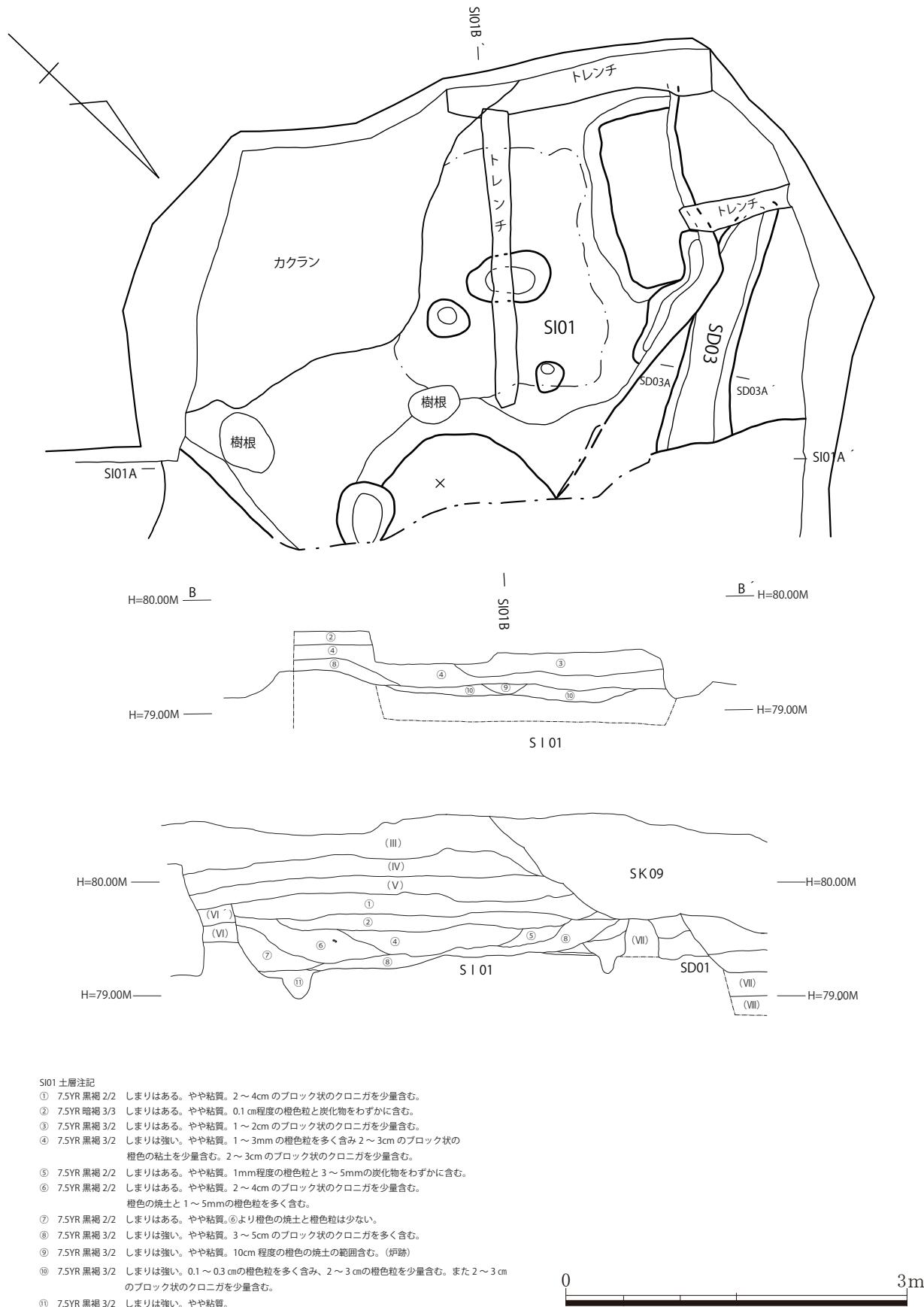
第5図 下層面遺構配置図① (S=1/100)



第6図 下層面遺構配置図②(S=1/100)



第7図 SD02 土層断面図及び SK06・SD03 断面図 (S=1/50)



第 8 図 SI01 遺構実測図 (S=1/50)

SI01 (第 8 図)

調査区西側の A2・A3 グリッドに位置する弥生時代後期の竪穴建物跡である。平面プランは、南側を搅乱により失われていたが方形プランを推定できる。残存する規模は、長軸 3.45m、短軸 2.65m を測る。床面は、検出面からの深さ約 0.5m を測り、中央に約 2.1m × 約 1.9m の範囲に硬化面が認められた。柱穴は 2 本を検出した。中央の炉跡埋土からは厚さ約 10cm の焼土が確認され、少量の炭化物が含まれていた。北東側に位置した隅丸状を呈するベッド状遺構の規模は、長軸約 1.8 m、短軸約 0.6 m、高さ約 0.1 m である。また、北西側の長方形を呈するベッド状遺構の規模は、長軸約 1.8 m、短軸約 0.8 m、高さ約 0.04 m である。北東側のベッド状遺構には、接する位置で土坑が確認された。また、北西側のベッド状遺構下位には、幅 0.37 m の周壁溝と考えられる溝を検出した。南西壁面土層断面において、検出面は VI 層であり、その上位にあたる V 層により埋没していることから SI01 は、SD01 より先行する。また、埋土の⑥・⑦層に多くの焼土を含む層を確認した。

[2] 繩文時代～弥生時代の出土遺物（第 9 図～第 11 図・第 14 図～第 15 図）

SK04 出土遺物の 1 は、縩文時代晚期の深鉢である。胴部が 1/3 程度残っており、最大胴部径は 36cm を測る。胴部の上位は、屈曲部より内湾せず直線的である。

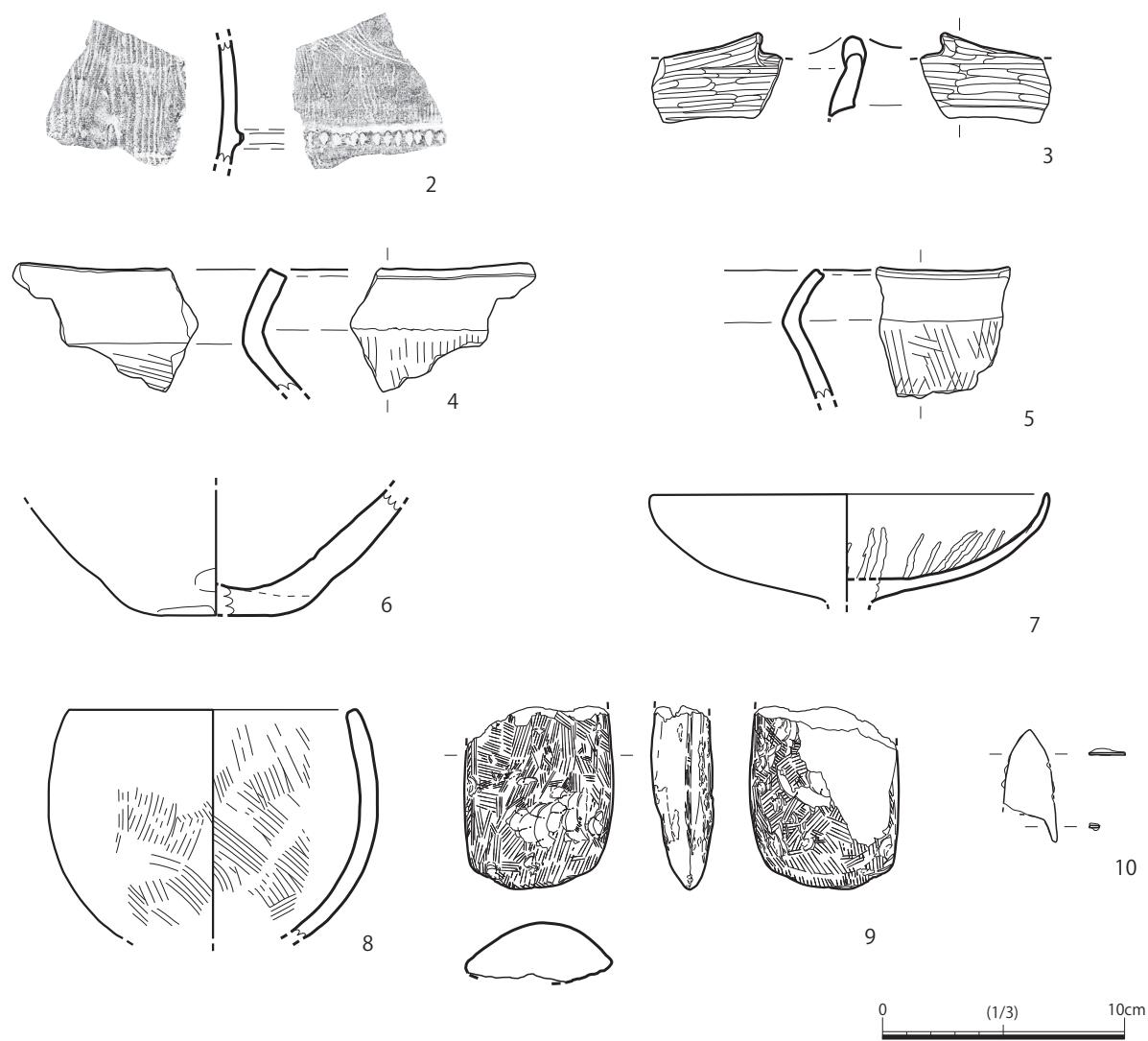
SK06 出土遺物の 2 は、弥生土器の甕または壺の胴部で、外面に突帯を貼り付け、刻み目を施す。

SD02 出土遺物は、3～10 である。3 は、黒色磨研土器の破片で、口唇部にリボン状突起を持つ浅鉢である。4、5 は弥生時代後期の甕で口縁部の破片。6 は、弥生土器の壺の底部である。7 は、弥生土器の高坏で、坏部内面は、中心から口縁部に向かって放射状にヘラミガキを施す。8 は、弥生時代後期の鉢型土器で、脚付の可能性もある。9 は、磨製石斧で、石材は蛇紋岩。10 は、鉄鎌である。

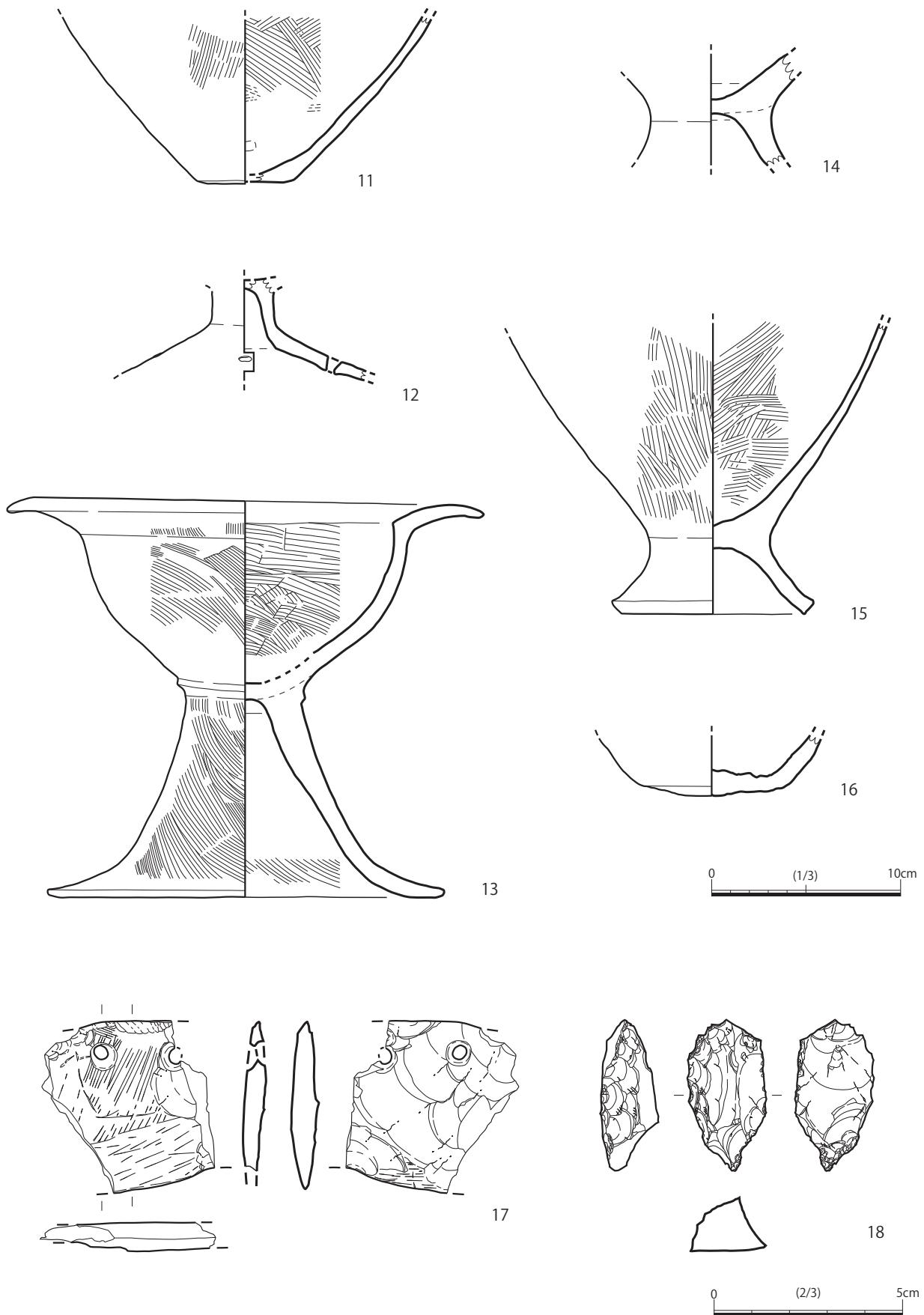
SI01 出土遺物は、11～18 である。11 は、弥生時代後期の壺底部。12、13 は、弥生時代後期の高坏である。12 は、脚部の 4 箇所に穿孔を施す低脚高坏である。13 は、口唇部の広い坏部と肥厚して裾部の広がった脚部を接合している。14 と 15 は、弥生時代後期の脚台付の甕である。16 は、壺の底部とみられ、器面が剥離しているため詳細は不明。17 は、石包丁で石材は頁石、両端部が欠損。18 は、スクレイパーで、石材はチャート、完形である。



第9図 SK04出土遺物実測図



第10図 SK06・SD02出土遺物実測図



第11図 SI01出土遺物実測図

[3] 中世の遺構

SD01 (第 13 図)

調査区北西から南東方向に延びる溝状遺構である。断面形状は、箱型で南東方向へ緩やかに下る。規模は長さ約 14.5m、幅約 2.1m ~ 3.2m、深さ約 1.5m を測る。障子掘状を呈しており、方形の段が 3 箇所に認められた。凸状面の縦断方向の幅は、北西側で約 2.0m、中央で約 1.5m、南東側で約 1.5m を測る。検出面は V 層であり、整地層と考えられる IV 層に覆われる。出土遺物は、中世陶磁器や銅錢などが認められた。

SK01 (第 24 図)

SK01 は、C2 グリッドに位置する土坑である。試掘調査トレーナーの断面において長軸約 1.4m、深さ約 0.6 m を確認した。断面形は、箱型を呈し、南東側に緩やかな段をもつ。SX03 に伴う遺構と考えられる。

SK02 (第 17 図)

調査区東側の C2・C3・D3 グリッドに位置する大型の土坑であり、規模は、長軸約 5.2 m、短軸約 2.1m、深さ約 1.35m を測る。上層面掘削後に下層面では調査区を拡張し、掘削を行った。平面プランは、全体の 1/3 程の検出であったが、長方形に近いプランと推定できる。断面形は、短軸方向の断面において段を設けた形状である。

検出面は、Ⅲ層であり土層堆積状況から人為的な堆積を示す。特に、⑤層では川原石を多量に含んでいた。SK02 は、SX01 の基壇裾部に覆われており、SX01 に先行する。埋土からは、中世の白磁、土師器などが出土した。

SK03 (第 13 図)

調査区東側の D3 グリッドに位置する土坑であり、規模は、長軸約 1.1m、短軸約 0.9m、深さ約 0.55m を測る。調査区壁面の土層断面から SK03 は、SD01 に後出する。

SK05 (第 13 図)

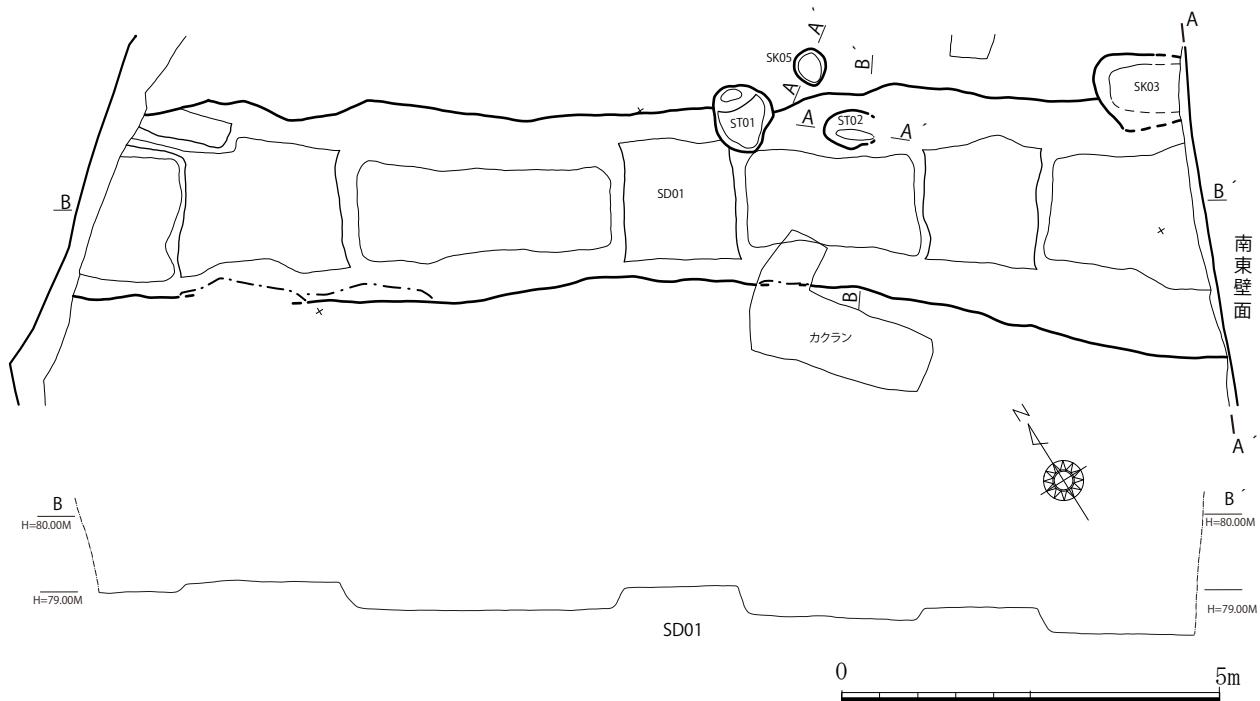
調査区北東の C3 グリッドで検出された土坑であり、平面プランは楕円形を呈する。規模は、直径 0.45m、深さ 0.12m を測る。埋土からは鉄製の穿孔具とみられる遺物が出土した。

SK09 (第 4 図)

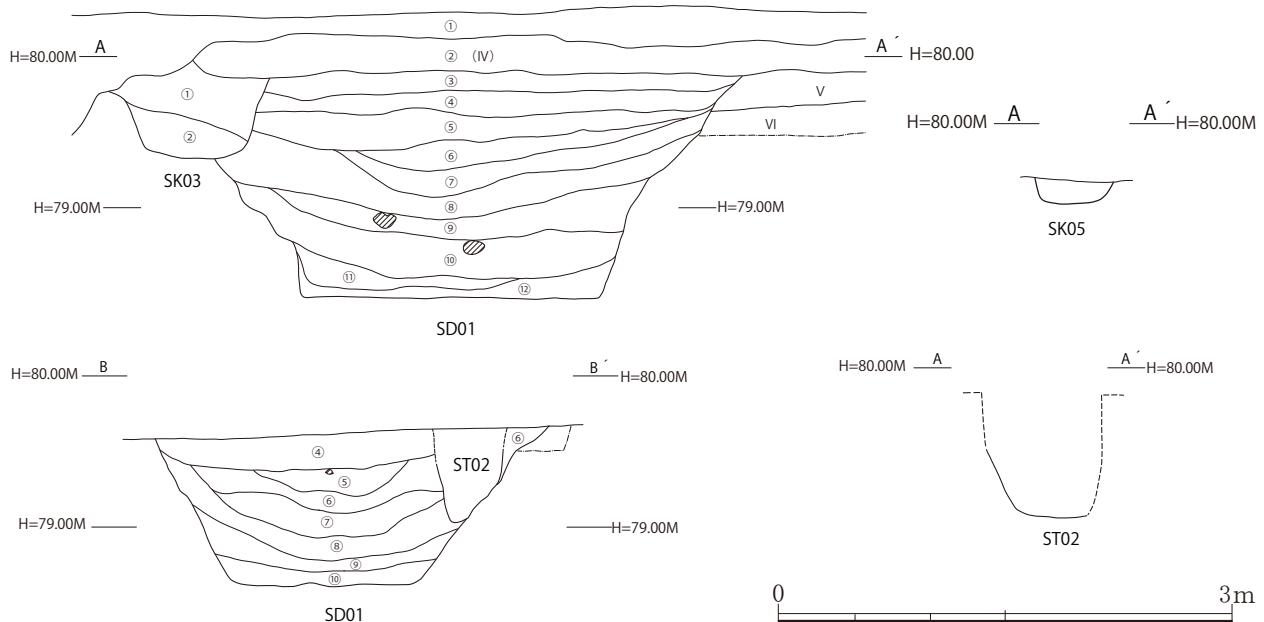
調査区南東の A2・A3・B3 グリッドに位置する土坑である。検出面はⅢ層であり、断面形は段を設けた形状で、南西壁面において規模は、幅約 2.85 m、深さ約 1.0m を測る。埋土からは中世の瓦質土器などが出土した。

ST02 (第 13 図)

ST02 は調査区北東の C3 グリッドで検出された土壌で ST01 に近接する。平面プランは、細長い円形状を呈し、断面形は箱型であったと推測される。規模は、残存する長軸約 0.8m、推定される深さ約 0.8m を測る。土層断面において SD01 と切り合い関係にあり、SD01 に後出する。埋土より骨片がわずかに出土していることから ST01 と同じく SX01 に伴なう土壌の可能性がある。



第12図 下層面遺構平面図② (S=1/100)



SD01 土層注記

- ① 7.5YR 黒褐 2/2 しまりはある。0.1～0.2 cmの黄褐色粒を多量含み、0.5～1.0 cmの黄褐色粒を少量含む。4～6cmのブロック状のクロニガを少量含む。(表土)
- ② 7.5YR 暗褐 3/3 しまりは強い。やや粘質。0.1～0.5cmの橙色粒を多量含む。IV層に対応。
- ③ 7.5YR 黒褐 3/2 0.1～0.2 cmの黄褐色粒と橙色粒やや多く含み、0.5 cm程度の炭化物を微量含む。しまりは強い。やや粘質。
- ④ 7.5YR 黒褐 2/2 0.1 cm程度の橙色粒を微量含み、1～2cmのブロック状のクロニガを少量含む。しまりはある。やや粘質。
- ⑤ 7.5YR 黒褐 2/2 ④と同色だが、やや暗い色。0.1～0.3 cmの橙色粒と黄褐色粒を少量含む。しまりはある。やや粘質。
- ⑥ 7.5YR 黒褐 2/2 ④と同色だが、やや暗い色。1～2 cmの橙色粒と黄褐色粒をやや多く含む。しまりはある。やや粘質。
- ⑦ 7.5YR 黒褐 3/2 ③に比べやや黄色味を帯びる。0.1～0.2 cmの橙色粒を少量含む。しまりはある。やや粘質。2～5cmのブロック状のクロニガを多く含む。
- ⑧ 7.5YR 黒褐 2/2 ⑦と同色だが、やや暗い色。0.1 cm程度の黄褐色粒を多く含む。しまりは弱い。やや粘質。
- ⑨ 7.5YR 黒褐 2/2 0.1 cm程度の黄褐色粒を少量含む。しまりはある。やや粘度が高い。10～20cmのブロック状のクロニガを少量含む。
- ⑩ 7.5YR 黒褐 2/2 0.1～0.3 cmの黄褐色粒をやや多く含む。しまりはある。粘度は高い。2～3cmのブロック状のクロニガを少量含む。
- ⑪ 7.5YR 黒褐 2/2 0.1～0.3 cmの黄褐色粒を少量含む 0.2～0.5 cmの小石粒をやや多く含む。全体的にザラザラしている。しまりはある。やや粘質。2～4cmのブロック状のクロニガをやや多く含む。
- ⑫ 10YR 黄褐 5/6 黄褐色粘土と 7.5YR 黒褐 3/2 の土⑪との混合。0.5～2cmの黄褐色粒とブロック状の黄褐色粘土を多く含む。しまりはある。粘度は高い。⑪よりやや黄色味が強い。

SK03 土層注記

- ① 7.5YR 黒褐 2/2 SD01の④よりわずかに明るく、⑤よりわずかに暗い。しまりはある。やや粘質。0.1cm程度の橙色粒を少量含む。
- ② 7.5YR 黒褐 2/2 ①と同色、同質だが、わずかに暗い色。0.1cm程度の黄褐色粒をわずかに含む。4～5cmのブロック状のクロニガを少量含む。

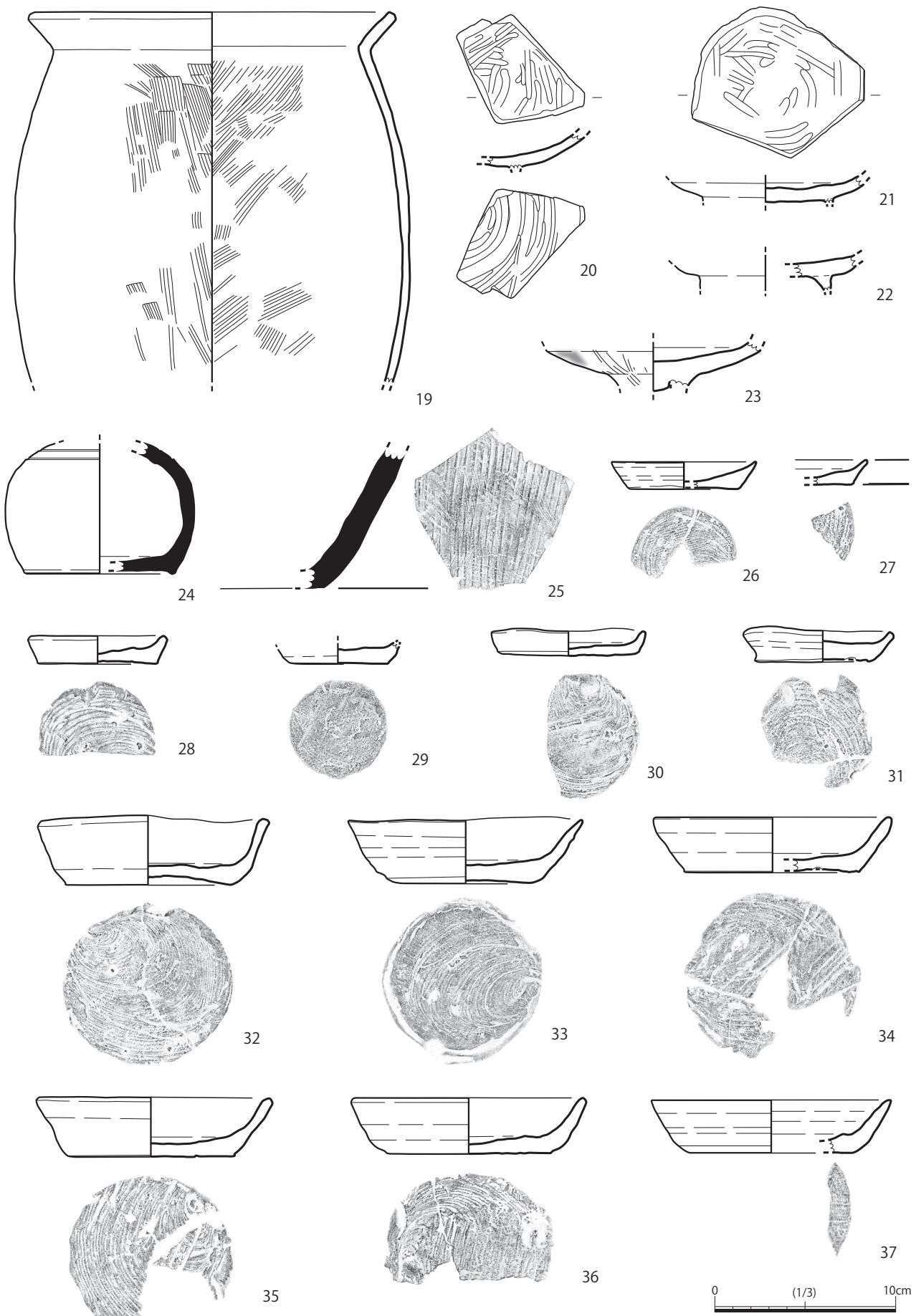
SK05 土層注記

- 7.5YR 黒褐 2/2、しまりはある。やや粘質。

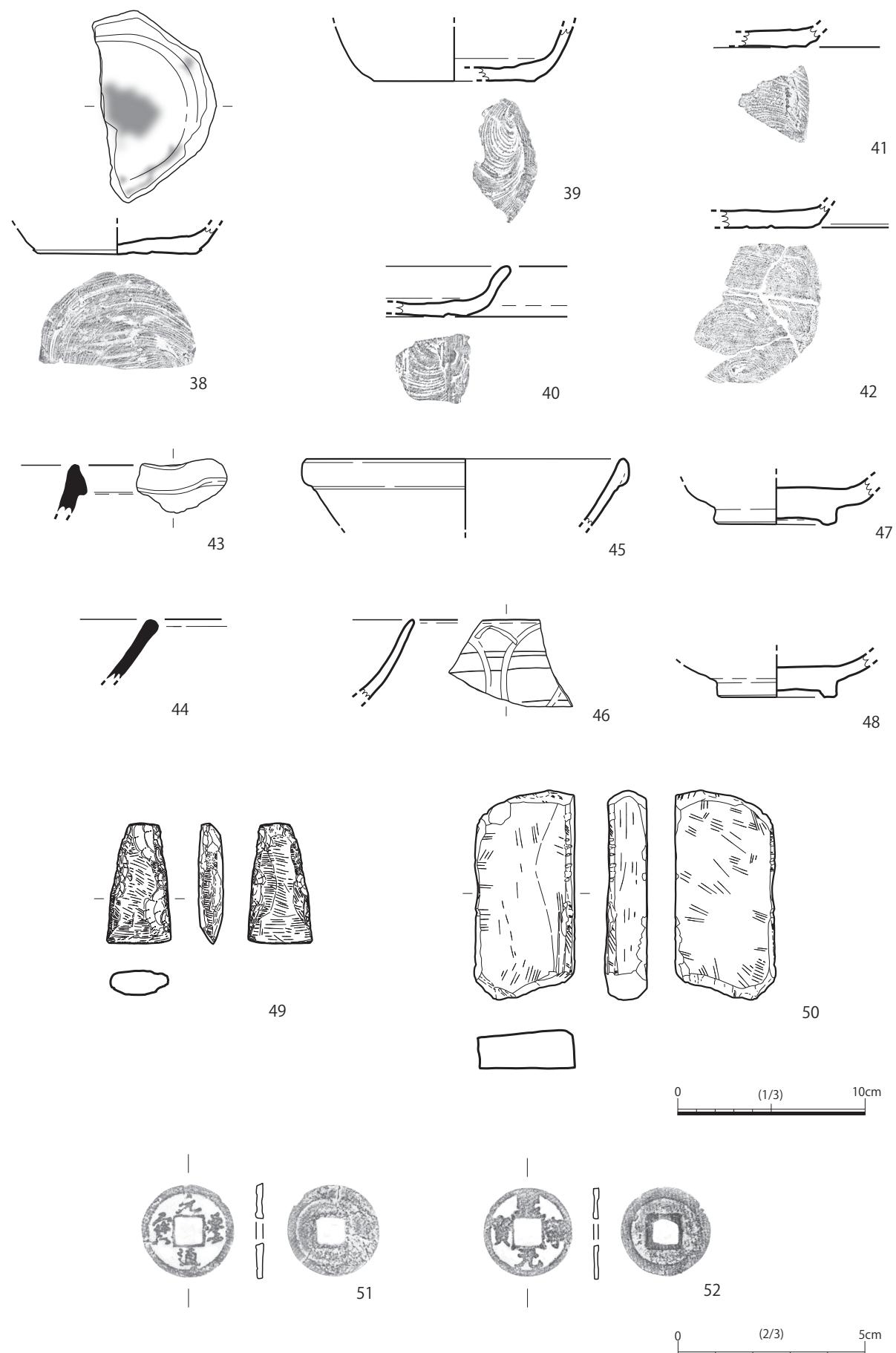
ST02 土層注記

- 7.5YR 黒褐 2/2 と 7.5YR 極暗褐 2/3 の土の混合。0.1～1cmの黄褐色粒とブロック状の黄褐色粘土を多量含む。しまりはある。やや粘質。微量の骨片が出土。

第13図 SD01 遺構土層断面図及び SK05・ST01 断面図 (S=1/50)



第 14 図 SD01 出土遺物実測図①



第15図 SD01出土遺物実測図②

SX01（第18図～第20図）

調査区南西のB2・B3・C2・C3・C4グリッドに位置する基壇状遺構である。規模は、長軸約7.4m、短軸約5.1mを測る。プランは南側にやや張り出しを持つ台形状を呈しており、調査区南西側はトレンチ設置により一部失われている。断面形は、東側に比べて西側が緩やかである。基壇の表面には川原石が葺かれており、中央部に集中している。

特に、基壇中央部より北西方向の位置からは、約20cm～30cmの6つの安山岩で組まれた堀方を伴う石組遺構が検出された。石組に囲まれた内部には、複数の川原石が堀方底面より約10cm上の位置に認められた。ST01は、石組のほぼ直下の位置にあたり、主体部と推定される。石組遺構は五輪塔の地輪下の地下遺構と考えた場合、地表面に石材が半分露出することから不安定となる。この石組遺構には卒塔婆があった可能性を挙げておきたい。

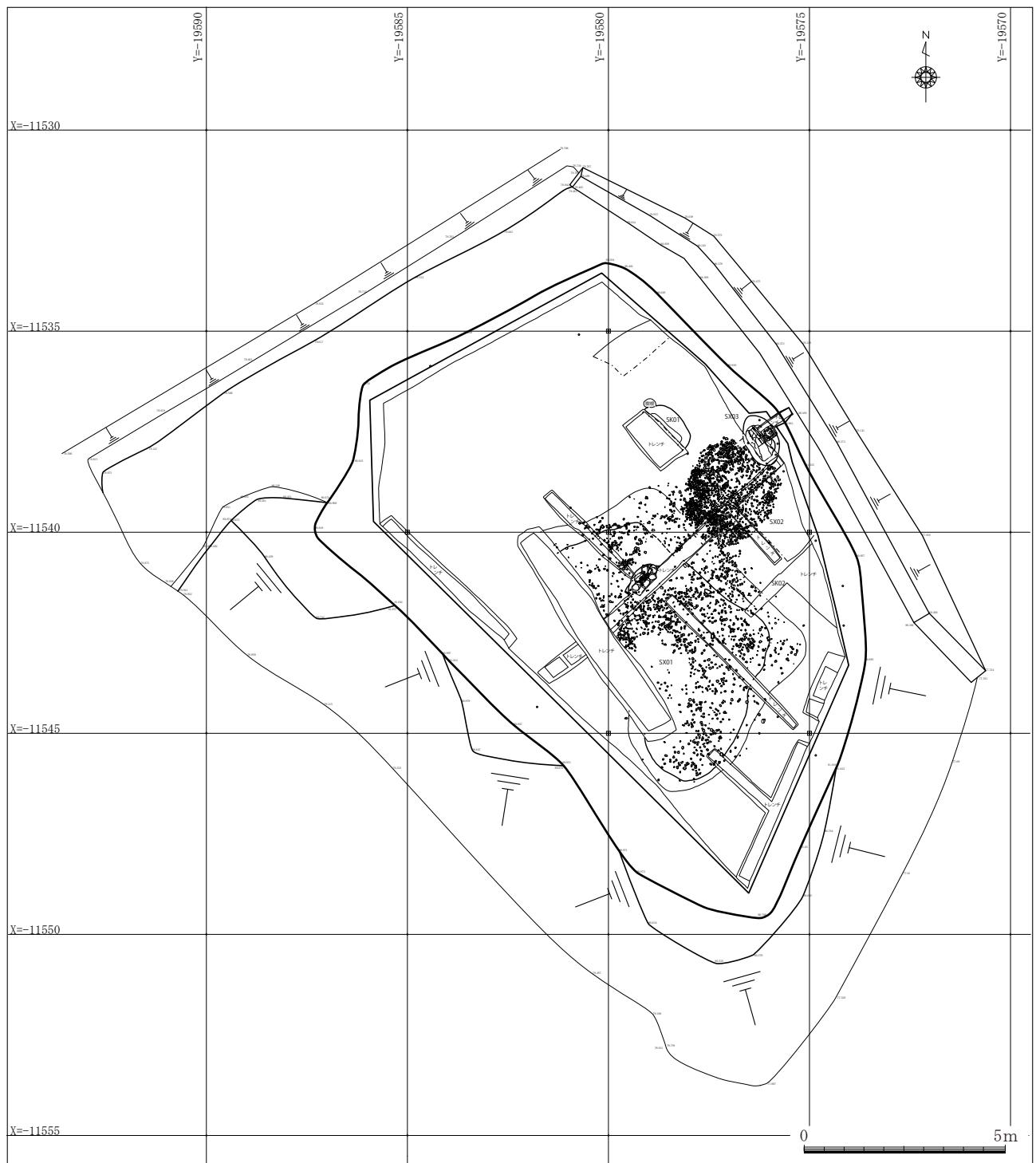
ST01は、下層面の調査時に検出されたため、SX01と連続して土層断面による確認はできなかった。しかし、検出された位置と出土状況からSX01に伴う土壌と判断した。ST01の平面プランは、楕円形を呈し、断面形は箱型に近い形状であったと推定される。規模は、直径約0.9m、深さ約0.15m～0.3mを測る。埋土からは、鉄釘、骨片が出土した。SX01の基壇はⅡ層を削平し、盛土の11層により構築されている。11層上にSX02の埋土にあたる7層があることから、SX01はSX02に先行すると考えられる。出土遺物は、白磁、瓦質土器、鉄滓、銅錢の「洪武通宝」などが出土した。

SX02（第23図）

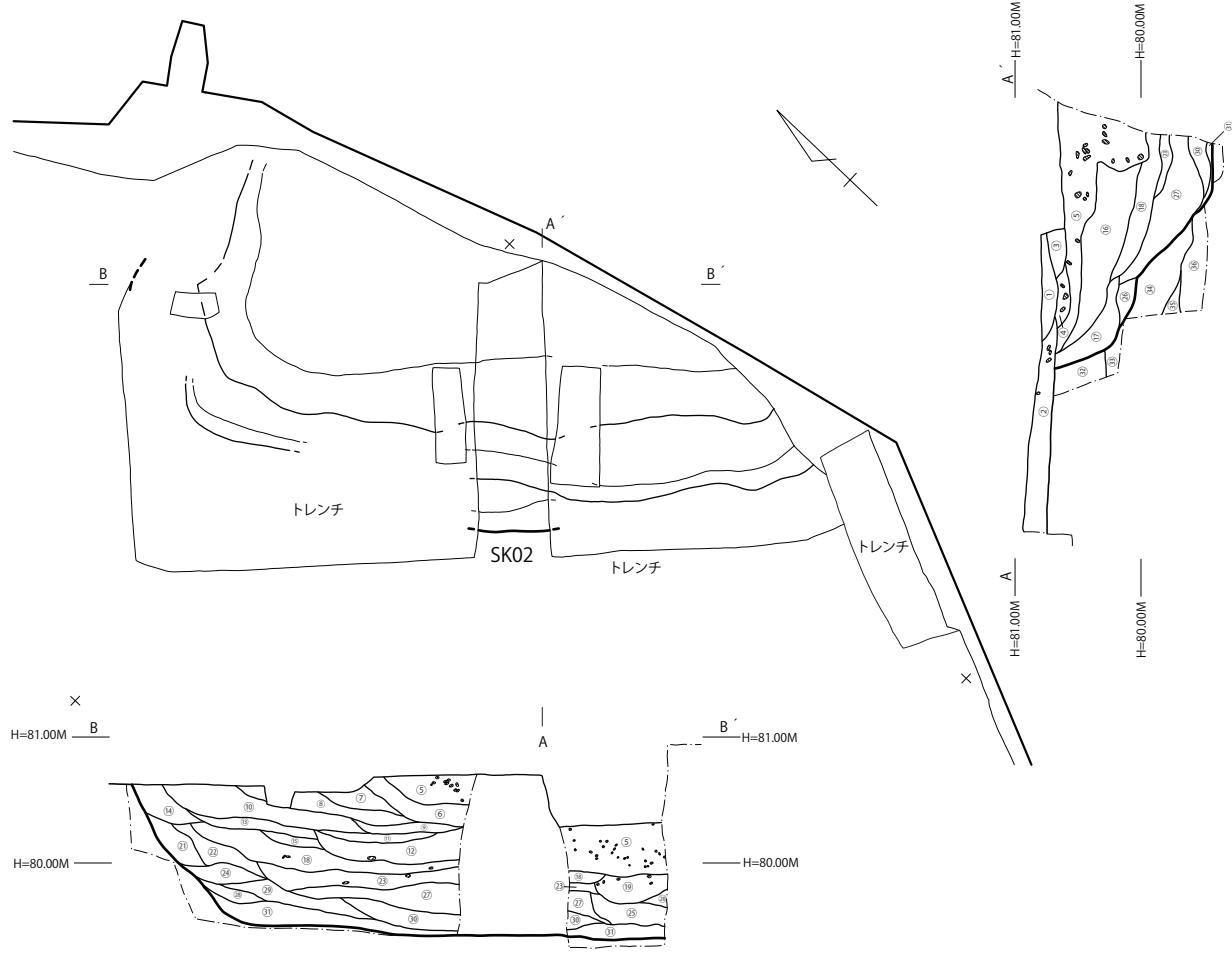
調査区北東のC2・C3グリッドに位置する基壇状遺構である。規模は、長軸2.60m、短軸2.24mを測る。平面プランは楕円形であり、堀方は認められず、断面形は、西側に比べて東がやや緩やかである。基壇の表面には川原石が葺かれており、特に西側に川原石が集中していた。当初は礫石経と考えていたが、X線分析調査をしたところ、墨書が認められなかったことや、SX03の直下から礫石経と推定される集石遺構が確認されたことなどから、基壇状遺構と判断した。SX03の土層堆積状況において、SX02上にSX03の4層（第25図）があることから、SX02はSX03に先行する。

SX03（第24図～第26図）

SX02に隣接して確認された板碑を設置した基壇状遺構である。土層堆積状況は、SX02上位及び基盤層となるⅡ層の上位に3層（第24図）があり、盛土の3層により構築されている。この3層上面はSK01と板碑堀方の検出面である。3層の上位には、盛土の2層により板碑を安置させる。1層は、近世以降の堆積土（表土）である。竹根により搅乱が激しく、土層堆積の確認は困難であったが、調査前の現況において基壇状を呈しており、盛土と考えられる上下2層からも基壇を構築としたと判断した。基壇状遺構の幅は7.00m、残存する奥行2.48m、高さ0.55mを測る。板碑の正面は北東側にあり、現在の竹迫日吉神社に通じる「参宮線」に面し、急な法面となっている。この「参宮線」は、聞き取りによれば近代以降の道路であることから中世の時期は、基壇が北東側に延びていた可能性がある。板碑正面に置かれている水盤の時期は、近世以降とみられる。板碑には「奉書一字一石大乘妙典一部」の銘文が記されており、板碑直下から川原石を伴う円形の土坑を確認した。板碑直下の土坑は、直径約0.53m、深さ0.24mを測る。板碑直下の掘方は長軸約1.32m、短軸約0.82m、深さ約0.50mを測る。出土した川原石を洗浄し、肉眼観察を行ったが墨書は確認できなかった。出土位置や銘文から礫石経と考えたい。調査当初、板碑はSX01よりも高い位置にあることから近世以降に移設されたと想定していた。しかし土層堆積状況や礫石経と考えられる土坑などから板碑は、原位置を保っていると判断した。板碑は、高さ1.46mで地表面からの高さが0.98m、最大幅0.90m、厚み0.36mを測る。板碑の銘文には願文「現世安穩 預修冥福 後世善処」とあり、願主の「大林大和守岑徳 月泉淨金壽位」の他に「于時大永八年戊子二月日 妙慶 道貞 長榮 妙清 道性禪門 妙善禪尼」とある。



第16図 上層面遺構配置図 (S=1/150)



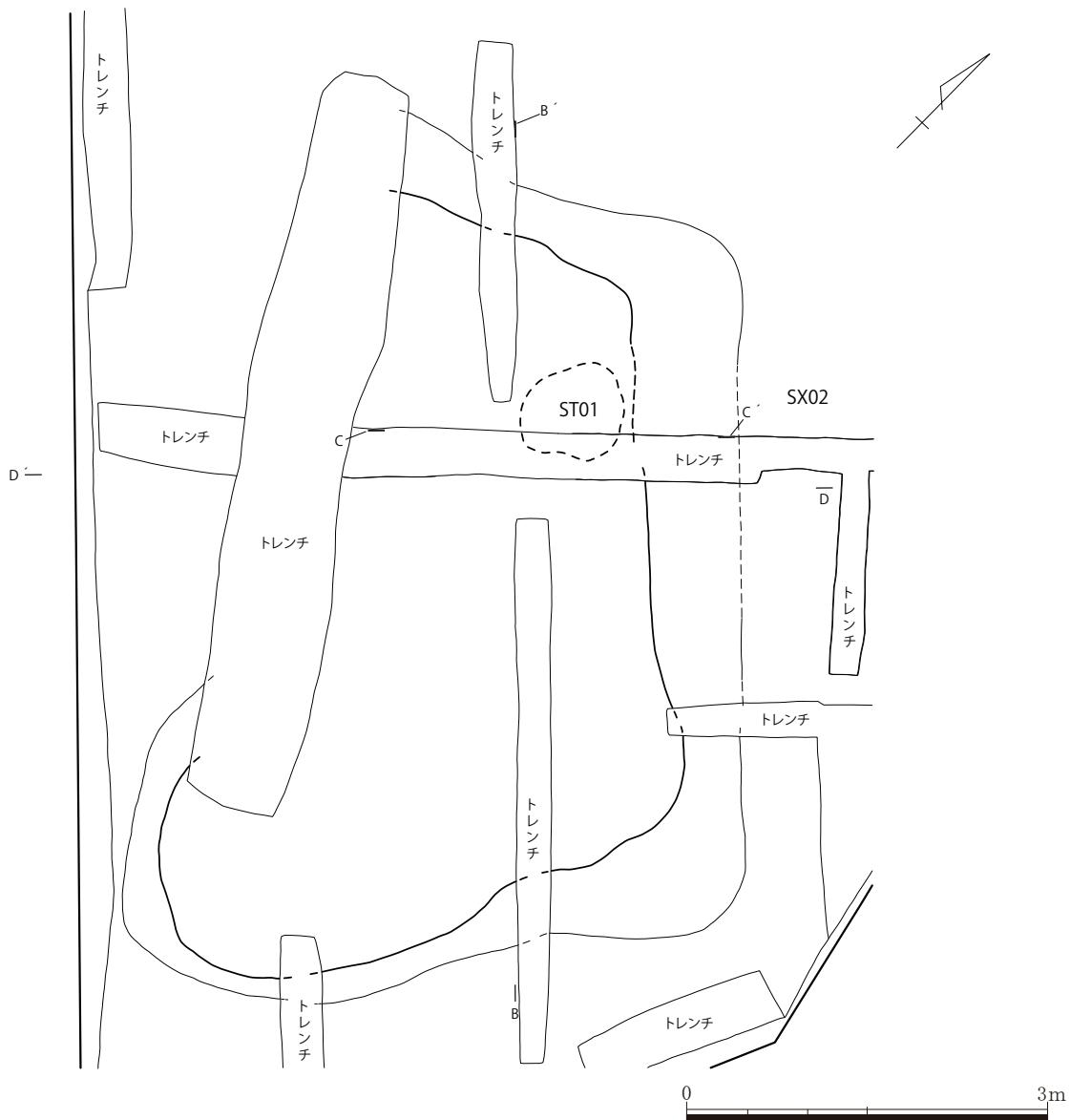
SK02 土層注記

- ① 7.5YR 極暗褐 2/3 やや粘質、しまりがある。礫石を含まない。
- ② 7.5YR 極暗褐 2/3 やや粘質、しまりがある。①と同色、礫石を多量含む。(S X01)
- ③ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。
- ④ 7.5YR 極暗褐 2/3 やや粘質、しまりがある。②と同じ、礫石を含む。
- ⑤ 7.5YR 極暗褐 2/3 しまりは弱い。①と同色、礫石を多量含む。
- ⑥ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。③と同じ、1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。
- ⑦ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。③と同じ、黄褐色のブロック状のニガを多く含む。
- ⑧ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。黄褐色のブロック状のニガを多く含む。⑦と同じ、1~2mm の黄褐色粒を多く含む。
- ⑨ 7.5YR 黒 2/1 しまりはある。
- ⑩ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。⑧より黄褐色のブロック状のニガを多く含む。⑨と同じ。
- ⑪ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。⑩と同じ。⑩より黄褐色のブロック状のニガは少ない。
- ⑫ 7.5YR 黒褐 2/2 ⑪と同色だがやや暗い色。しまりはある。1~2mm の黄褐色粒を多く含む。
- ⑬ 7.5YR 黒 2/1 の土と⑩の 7.5YR 黒褐 2/2 の土との混合。
- ⑭ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。⑧と同じ。⑧より黄褐色のブロック状のニガは少ない。
- ⑮ 7.5YR 黒 2/1 ⑯と同色だが、やや明るい色。しまりはある。1~2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ⑯ 7.5YR 極暗褐 2/3 ⑯と同じで、1mm 程度の黄褐色粒を少量含み、2~3cm の黄褐色のブロック状のニガを少量含む。
- ⑰ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは弱い。③と同じ、1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。
- ⑱ 7.5YR 黒 2/1 しまりはある。
- ⑲ 7.5YR 黒 2/1 しまりはある。⑯よりやや暗い色。礫石は含まない。
- ⑳ 7.5YR 黒褐 3/2 10cm 以上の黄褐色のブロック状のニガを多く含む。しまりはある。1~2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉑ 7.5YR 黒褐 3/2 ㉑と同色。10cm 以上の黄褐色のブロック状のニガを含む。しまりは強い。1~2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉒ 7.5YR 黒 2/1 ㉒と同色。しまりはある。3~5cm の黄褐色のブロック状のニガを少量含み、1~2mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉓ 7.5YR 黒褐 3/2 の土に 3~5cm のブロック状の黄褐色粘土を少量含み、1mm 程度の黄褐色粒を多量含む。
- ㉔ 7.5YR 黒 2/1 しまりはある。㉑と同色、同質だが礫石は含まない。
- ㉕ 7.5YR 極暗褐 2/3 ㉕と同色。1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。2~5cm の黄褐色のブロック状のニガを多く含む。
- ㉖ 7.5YR 黒 2/1 ㉖と同色だが、㉕より 3~10cm の黄褐色のブロック状のニガを多く含む。1~2mm の橙色粒を少量含む。
- ㉗ 7.5YR 黒褐 3/2 ㉗と同色だが、ブロック状の黄褐色粘土は含まない。
- ㉘ 7.5YR 極暗褐 2/3 しまりはある。1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。7.5YR 黒 2/1 の土が少量混入。
- ㉙ 10YR 黒褐 2/2 しまりは強い。1~3mm の黄褐色粒を少量含む。
- ㉚ 10YR 黒褐 2/3 しまりは強い。
- ㉛ 7.5YR 極暗褐 2/3 ㉛と同色。1mm 程度の黄褐色粒を少量含む。
- ㉜ 7.5YR 暗褐 3/3 基本土層のⅢ層よりしまりは強い。やや粘質。全体的にクロニガを多く含み、0.1~0.3 cm の橙色粒をやや多く含む。基本土層のⅣ層に対応。
- ㉝ 7.5YR 黒 2/1 ㉝と同色だが、㉜より 3~10cm の黄褐色のブロック状のニガを多く含む。1~2mm の橙色粒を少量含む。
- ㉞ 7.5YR 黒褐 2/2 しまりは強い。
- ㉟ 10YR 黒褐 2/3 しまりは強い。

第17図 SK02 遺構実測図 (S=1/60)



第18図 SX01 遺構実測図① (S=1/60)

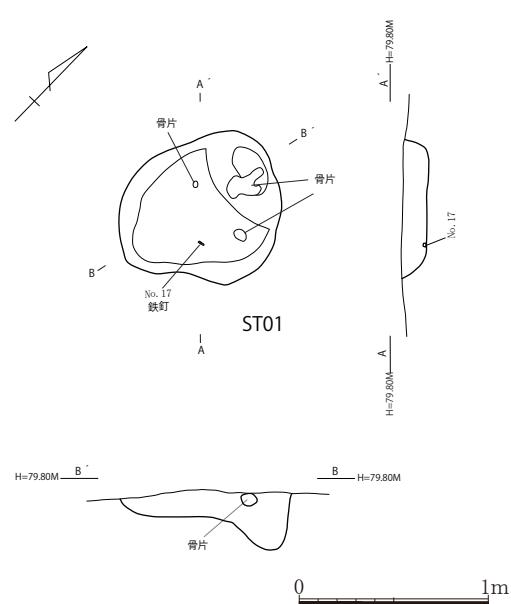


SX01 土層注記

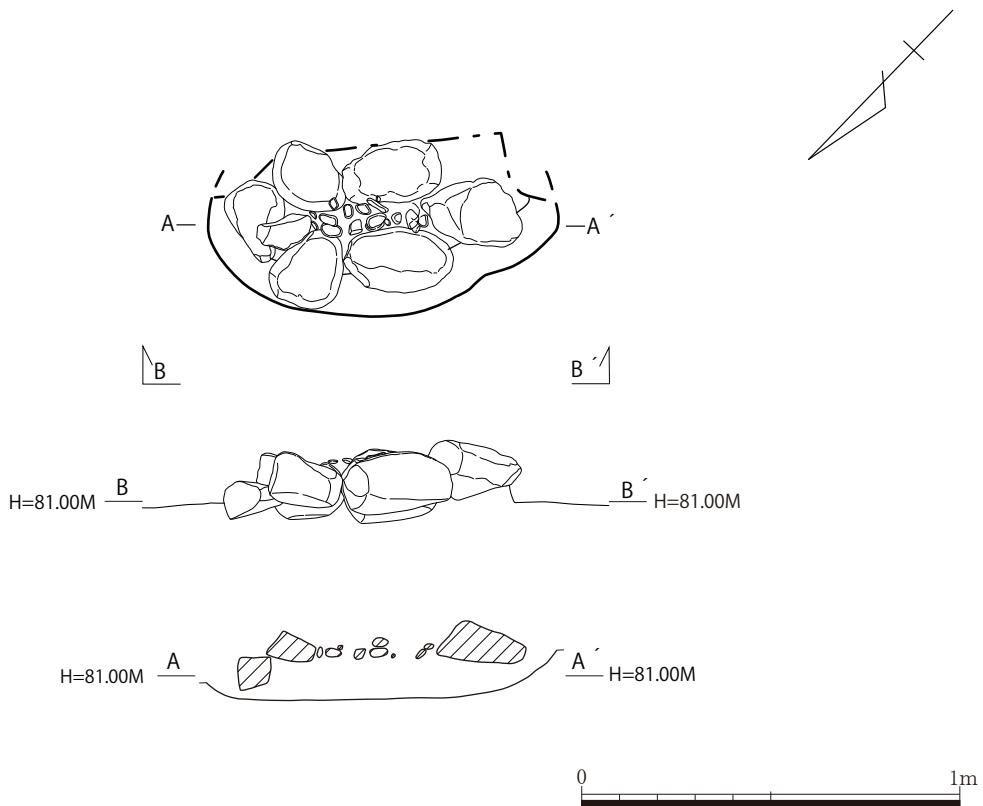
- 1 表土
 2 10YR 黒褐2/2 しまりは弱い。やや粘質。0.1cm程度の橙色粒を多く含む。
 3 10YR 黒褐2/3 しまりは強い。やや粘質。0.1cm程度の橙色粒をやや多く含む。
 4 7.5YR 黒褐3/2 しまりは弱い。やや粘質。
 5 10YR 黒褐2/2 しまりは弱い。やや粘質。I層に対応。
 6 10YR 黒褐2/2 しまりは弱い。やや粘質。
 7 10YR 黒褐3/2 しまりはある。やや粘質。礫石を多量含む。0.1cm程度の橙色粒を少量含む。
 8 10YR 黒褐2/3 しまりは強い。やや粘質。
 9 7.5YR 極暗褐2/3 しまりはある。礫石を多量含み、10~20cmの石を数個含む。
 10 7.5YR 黒褐2/2 しまりは強い。やや粘質。2~3cmのブロック状のクロニガを少量含み、1~3mmの橙色粒をやや多く含む。III層に対応。
 11 10YR 黒褐2/2 しまりは強い。やや粘質。0.1cm程度の橙色粒をやや多く含む。
 12 7.5YR 黒褐3/2 しまりは強い。3~5cmのブロック状の黄褐色のニガを少量含み、0.1cm程度の黄褐色粒を多量含む。II層に対応。
 13 7.5YR 黒褐2/2 しまりは強い。やや粘質。2~3cmのブロック状のクロニガを少量含み、1~3mmの橙色粒をやや多く含む。III層に対応。
 14 7.5YR 暗褐3/3 しまりは強い。やや粘質。2~3cmのブロック状のクロニガを多量含み、1~3mmの橙色粒を多量含む。IV層に対応。
 15 7.5YR 黒褐2/2 やや粘質。しまりは強い。0.1~0.3cmの橙色粒を多量含む。V層に対応。

ST01 土層注記

- 7.5YR 暗褐3/3 1cm以下のブロック状のクロニガを含む。IV層の土が混入。



第19図 SX01 遺構実測図②(S=1/60) 及び ST01 遺構実測図 (S=1/40)



第 20 図 SX01 石組実測図 (S=1/20)

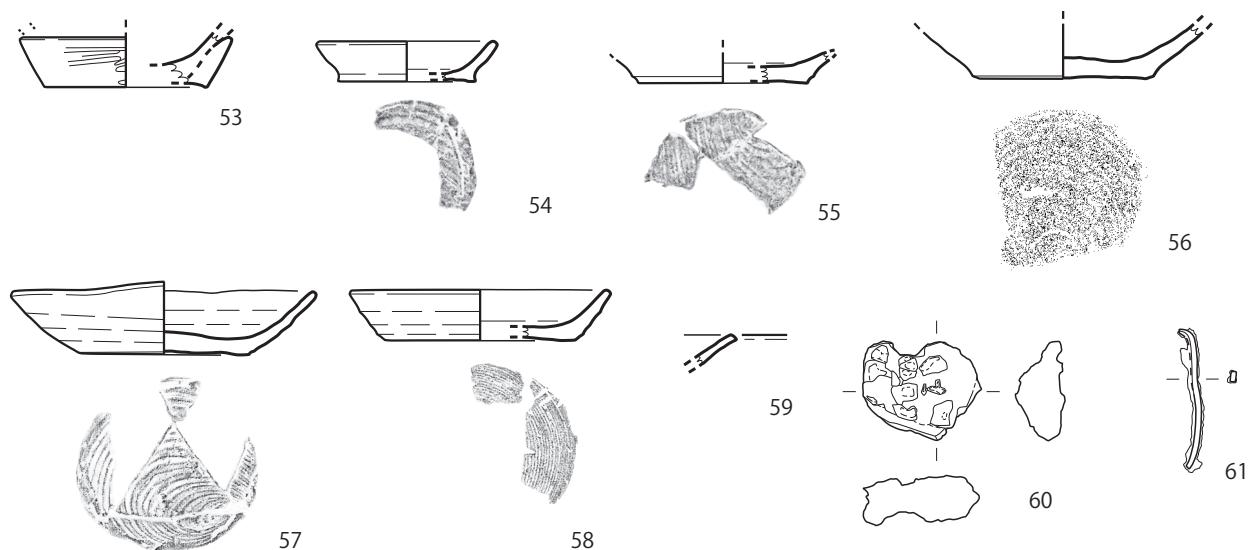
[4] 中世の出土遺物 (第 14 図～第 15 図・第 21 図～第 22 図・第 27 図～第 30 図)

SD01 出土遺物は、19～52 である。19 は、弥生土器の甕。20～22 は、高台付壺で 20 と 21 は、内面及び内外面にヘラミガキの痕跡が認められる。23 は、高壺で、内外面に赤彩の痕跡が認められる。24 は、古代の須恵器で小型壺の口縁部から頸部が欠失している。器形は肩部が丸みを帯び、底部へ向かいながら、やや窄まる。25 は、須恵器の甕及び壺の底部で、体部外面にタタキ目が残る。26～31 は、中世土師器の小皿で、口径はおよそ 6cm 代後半から 8cm 代前半を測る。底部切り離し技法は回転糸切り。32～42 は、中世土師器の壺で、口径は 10cm 代前半から 13cm 代前半を測る。底部切り離し技法は回転糸切りで、板状圧痕が認められるものもある。43 は、中世須恵器で、東播系片口鉢の口縁部。44 は、壺の破片で、東播系須恵器である。45 は、白磁碗で、口縁部に肉厚の玉縁を持つ。46 は、青磁碗で、外面に片切り彫りの蓮弁文を施す。47 と 48 は、青磁碗の高台部。49 は、磨製石斧で、石材は蛇紋岩。50 は、砥石で石材は流紋岩 (天草砥石)。51 と 52 は、宋錢で、51 が元豐通宝で 52 が熙寧通宝。

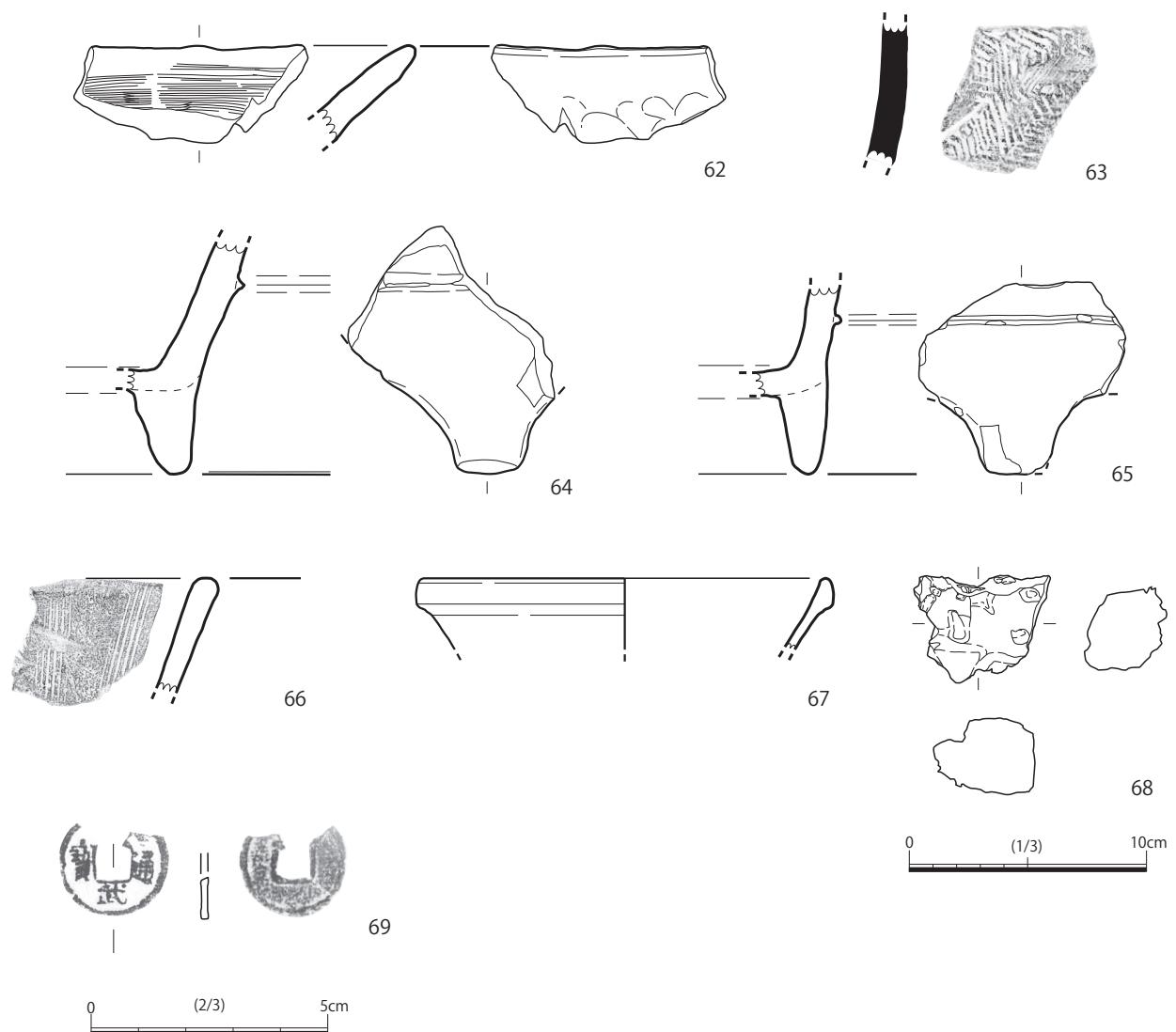
SK01 出土遺物 53 は、中世土師器の小皿で、焼成時に 2 個体分が溶着したと思われる。SK02 出土遺物は 54～61 である。54 と 55 は、中世土師器の小皿。56 は、復元底径 7.2cm を測る。底部切り離し技法はともに回転糸切りである。57、58 は、中世土師器の壺。57 は、口径 12.1cm で、ほぼ完形となる。58 は、復元口径 10.3cm を測る。底部切り離し技法はいずれも回転糸切りで、板状圧痕は認められなかった。59 は、白磁皿の破片で、口縁部はやや外反気味になる。60 は鉄滓。61 は、鉄釘と思われる。

SX01 出土遺物は、62～69 である。62 は、土師器の甕の口縁部で、外面に指頭圧痕が認められる。63 は、須恵器の甕及び壺の胴部で、外面にタタキ目が残る。64 と 65 は、瓦質土器で火鉢である。体部外面下位に突帯を貼り付ける。ともに脚が付く。66 は、瓦質土器の擂鉢。67 は、白磁碗で、口縁部に肉厚の玉縁を持つ。68 は鉄滓。69 は、明錢で、洪武通宝である。

SX03 出土遺物の 70 は、水盤で、石材は阿蘇溶結凝灰岩である。



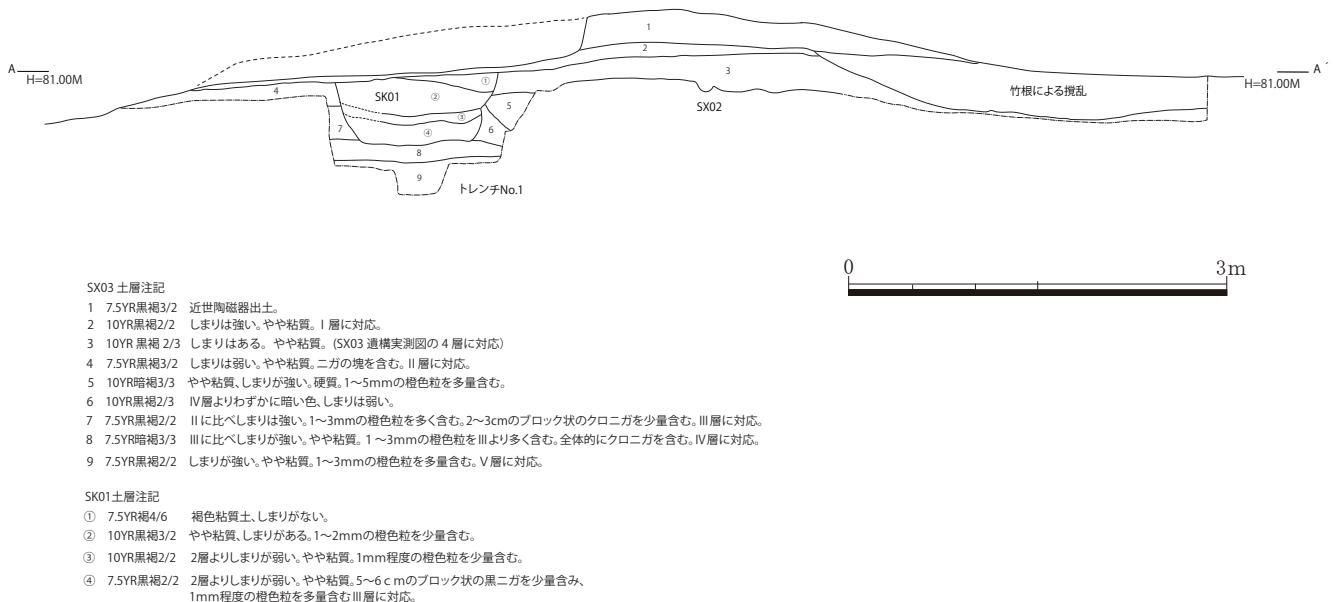
第21図 SK01・SK02出土遺物実測図



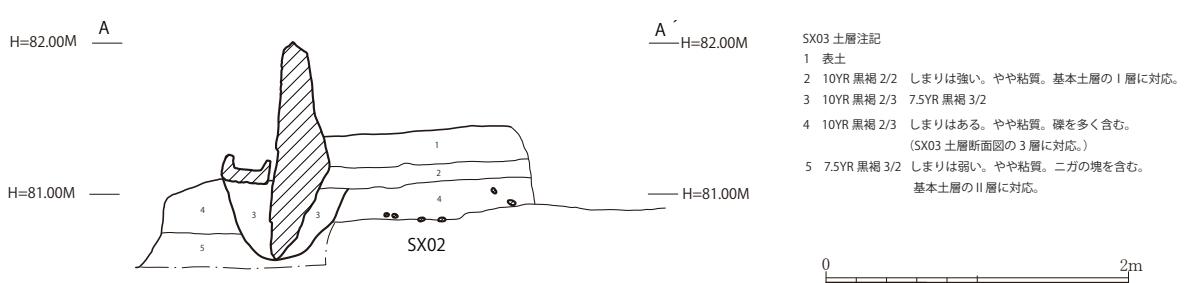
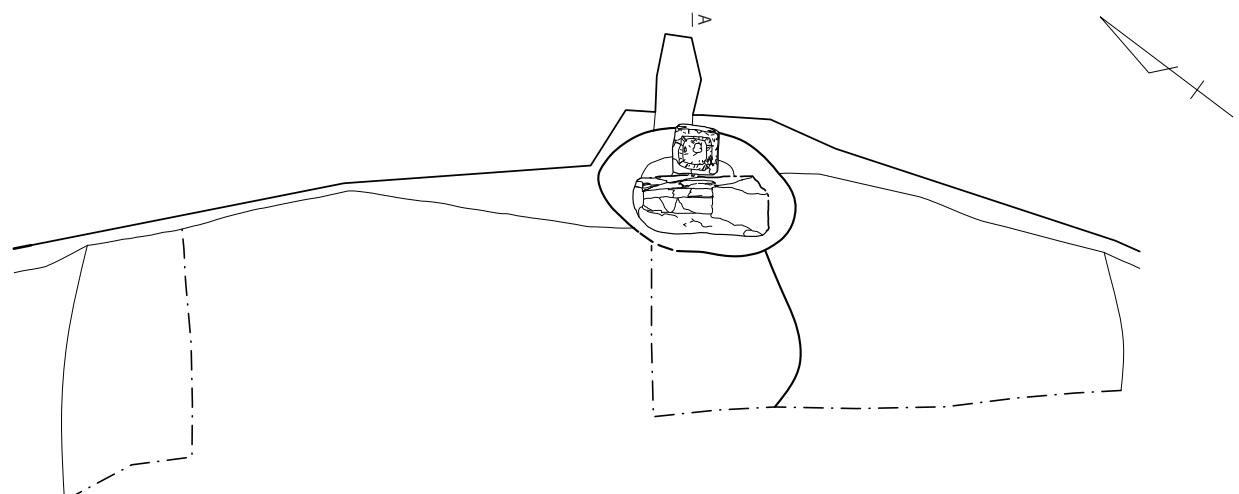
第22図 SX01出土遺物実測図



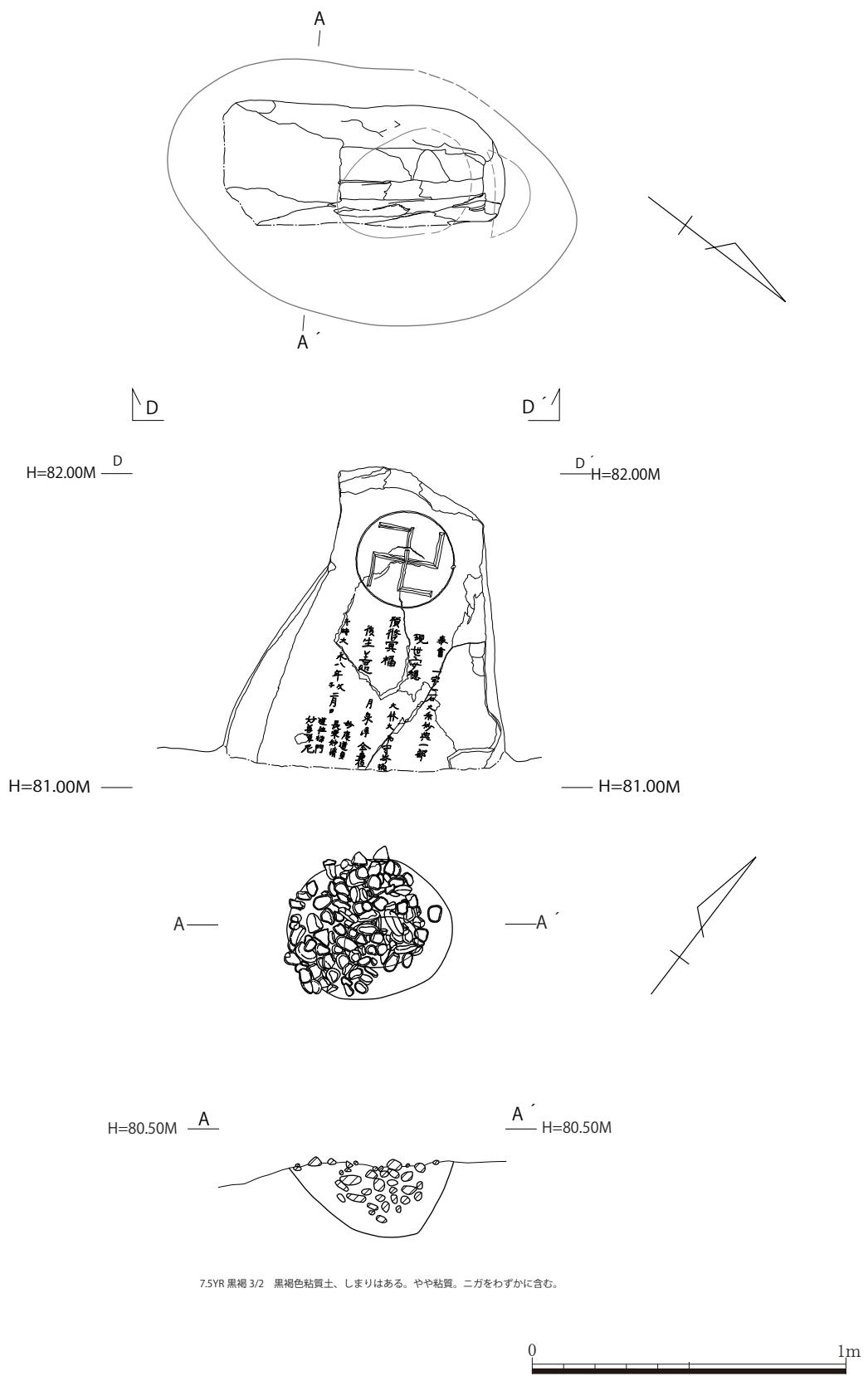
第 23 図 SX02 遺構実測図 (S=1/40)



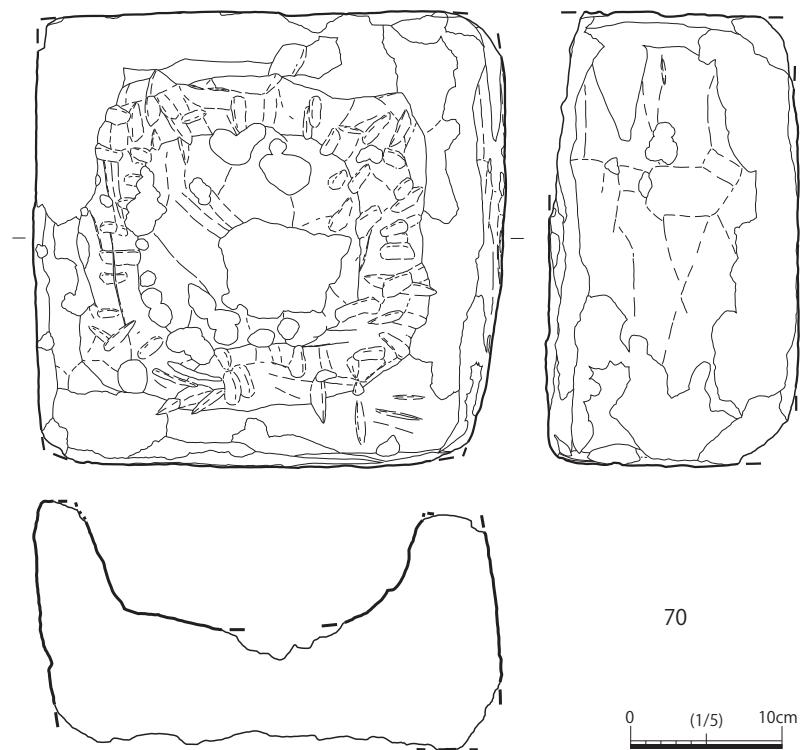
第24図 SK01 及び SX03 土層断面図 (S=1/60)



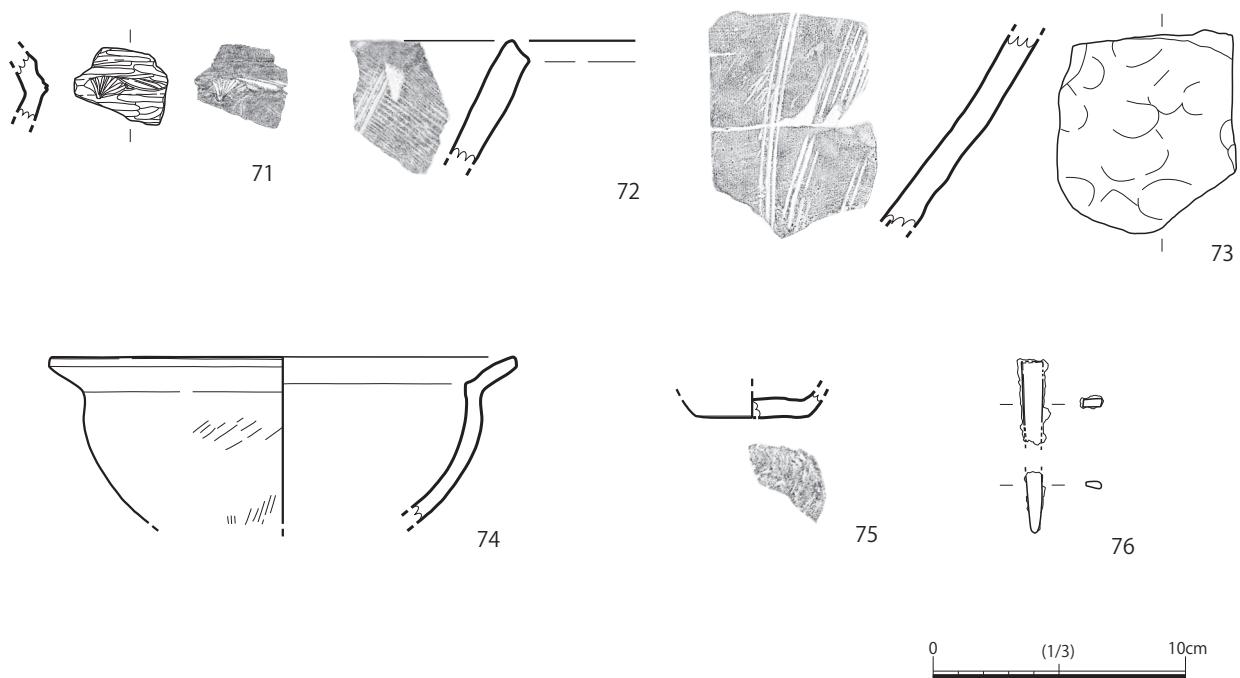
第25図 SX03 遺構実測図① (S=1/50)



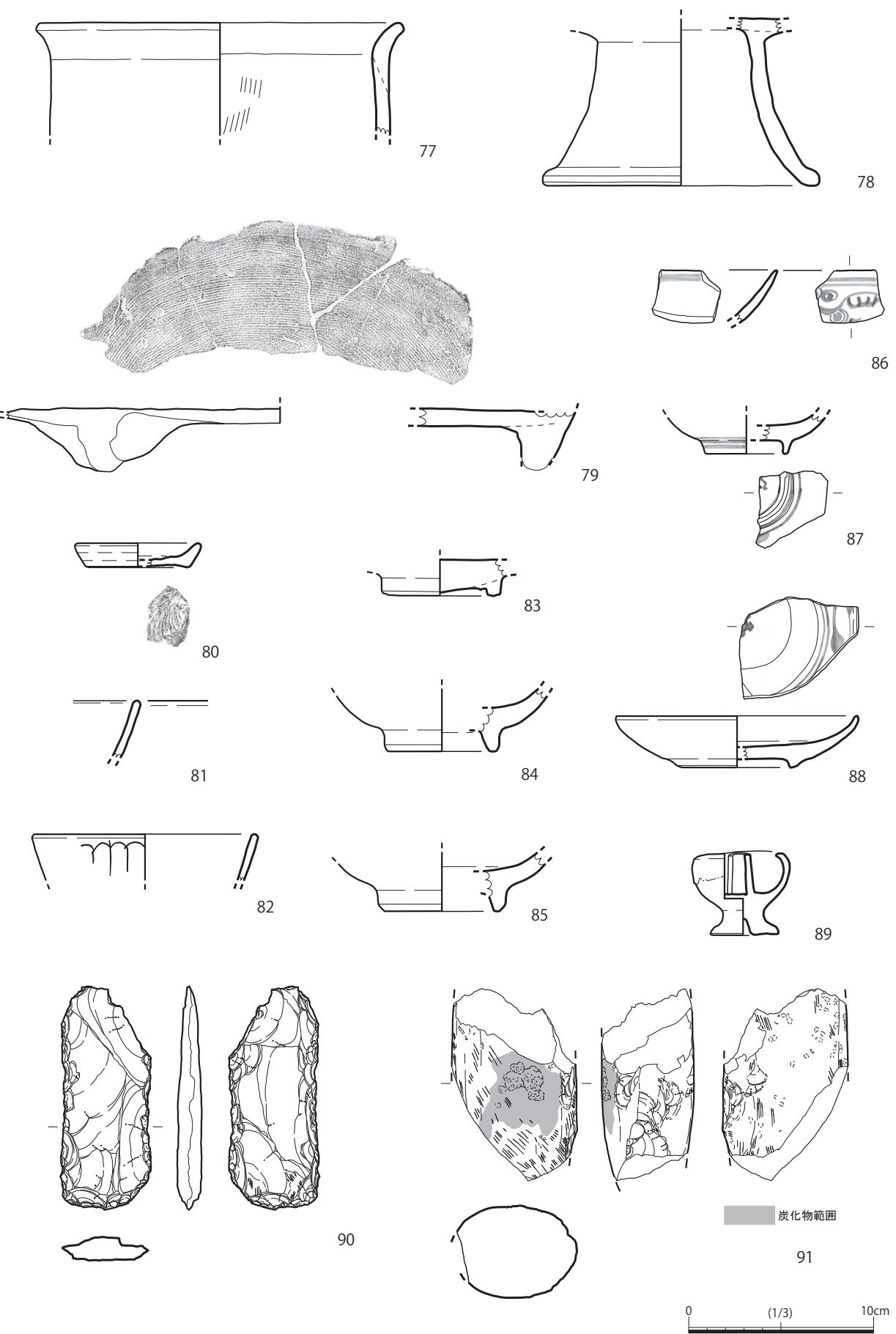
第 26 図 SX03 遺構実測図② (S=1/20)



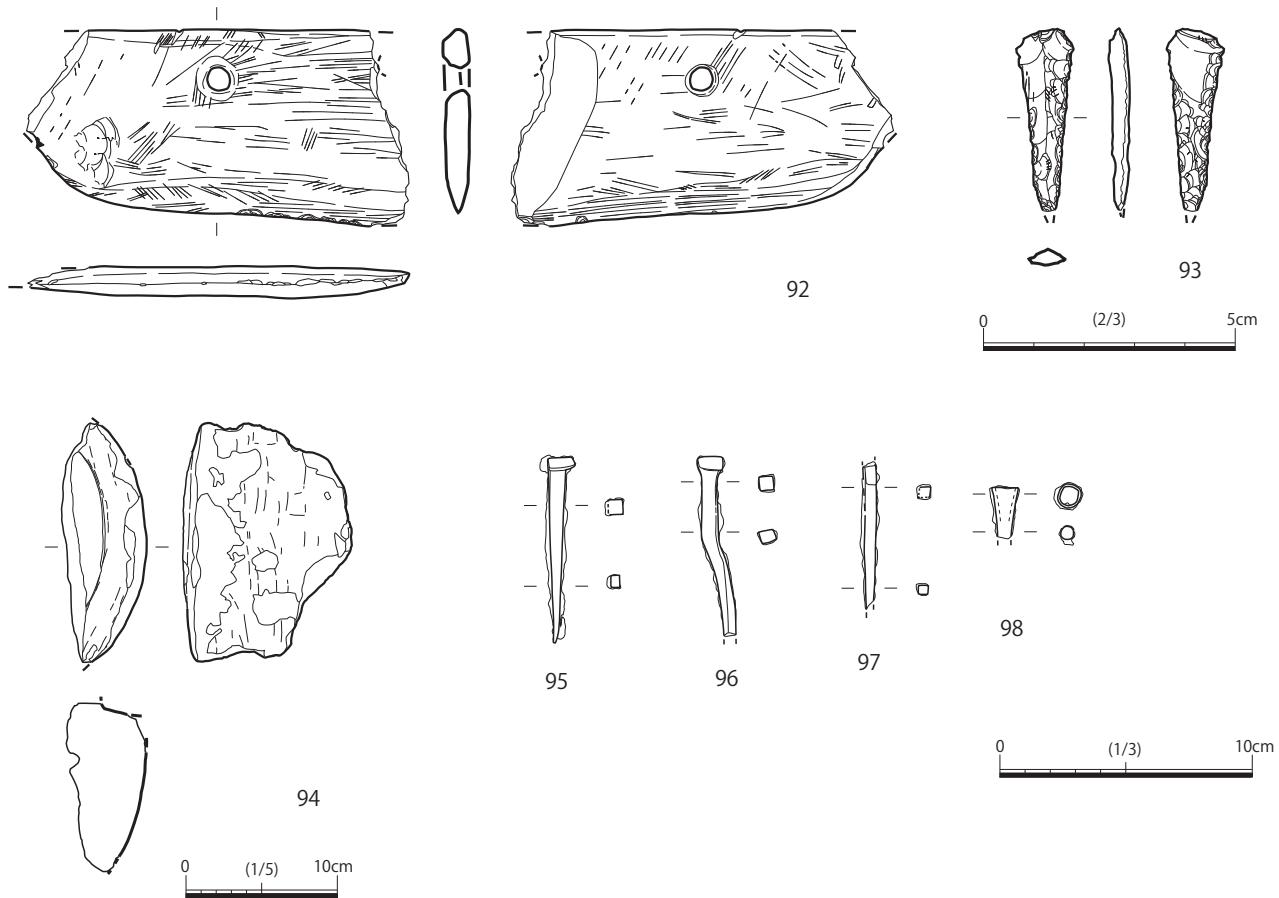
第27図 SX03出土遺物実測図



第28図 SK05・SK08・SK09・SP01・SP13出土遺物実測図



第29図 遺構外出土遺物実測図①



第30図 遺構外出土遺物実測図②

SK08出土遺物の71は、黒色磨研土器で、突帯部に二枚貝の押圧を施す。浅鉢である。

SK09出土遺物の72と73は、瓦質土器の擂鉢。SP13の74は、弥生土器の高環坏部と思われる。口唇部は斜め上方に開く。SP01出土遺物の75は、復元底径が4.5cmの土師器の小皿で、底部切り離し技法は回転糸切りである。SK05の76は、鉄製品で、穿孔具もしくは鉄釘と思われる。

遺構外出土遺物は、77～94である。77は、土師器の甕である。78は、土師器の高坏の脚部。79は、瓦質土器で火鉢の脚。80は、復元口径が6.8cmの中世土師器の小皿で、底部切り離し技法は回転糸切りである。81は、青磁碗で、口縁部の破片。82は、青磁碗で、外面に片切り彫りの幅の狭い蓮弁文を施す。83は、青磁碗の高台部で、高台は低い。84は、青磁碗の高台部で、やや高い高台を持つ。85は、青磁碗の高台部で、やや高い高台を持つ。86は、染付碗で外面に界線と草花文を施す。87は、近世の染付碗で、高台内に銘が認められる。88は、染付皿で、内面は蛇の目釉剥ぎを施し、文様を描く。89は、近世の陶器の燭台。90は、打製石斧で、石材は緑色片岩、完形。91は、太形蛤刃石斧で、石材は玄武岩と思われる。92は、石包丁で、石材は頁石。93は、石錐で、石材はチャート、先端部を若干欠損。94は、五輪塔の空風輪で、石材は阿蘇溶結凝灰岩、表面の加工は丁寧である。95～97は、鉄釘である。98は、空洞があり、キセルと思われる。

第IV章 まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代後期の SI01（竪穴建物跡）1基と SD02（溝状遺構）1基が確認された。竪穴建物跡は、土層堆積状況において溝状遺構より古い時期と思われる。この溝状遺構は、陣ノ内遺跡で確認された弥生時代終末の環濠と考えられる溝状遺構とは時期差があり、軸方向などから連続する遺構ではない。SD02 及び SI01 と切り合い関係にある SD03 は、弥生時代後期より古い時期である。

SD01 は、南東方向へ下がり、堀底面が凹凸となる障子堀状を呈している。中世宇土城跡において障子堀にみえる千畳敷北側の横堀（SD02）は、掘削途中の堀跡である。SD01 の障子堀状を呈する特徴は、未完成ではなく、いわゆる「障子堀」とも異なる。県内においてもこのような事例は稀有である。陣ノ内遺跡は、中世の堀跡が複数確認され、竹迫城絵図に竹迫氏館跡の記載や原口新城跡との位置関係より竹迫氏関係の館跡と推定した。また、堀底に構築された地下式土壙 3基（16世紀～17世紀代）、土壙（近世～近代）や礫石経 3基（近世末）を確認しており、調査区外の北西側に清寿院跡の堂宇と石造物群が存在することから、この遺跡は、合志氏が竹迫氏に変わり竹迫城を拠点とした16世紀前半（天文期）に合志氏の菩提寺である清寿院跡の敷地となったと考えられる。今回、確認された SD01 の主軸方向は、陣ノ内遺跡の堀跡や原口新城跡と概ね一致しており、本遺跡は、原口新城跡もしくは陣ノ内遺跡の一郭で竹迫氏に関連した城館であったことが考えられる。原口新城跡の調査では、15～16世紀とみられる土壙 13基、地下式土壙 1基が確認された。調査区外の北西側にあたる台地先端部に天正 17 年銘の天台宗僧侶の墓石が存在していることから僧坊等の施設があった可能性を調査者は指摘している。

SK02 は、Ⅲ層で検出された大型の土坑であり、SK02 の上層から中層にかけて多くの川原石や鉄釘などが出土している。この状況は、SK02 が構築された以前の時期に中世の墓所がすでに存在していたことを示唆する。SD01 を覆う層位のⅣ層は、墓所を造営するための整地層であった可能性が考えられる。今回の調査では、調査区が狭く、墓地整理を行った明らかな痕跡を確認していない。しかし、SK02 の構築されたⅢ層上面にはすでに墓地が存在し、SK02 の埋没後、SX01 が構築された段階に墓地整理が行われたと想定したい。

基壇状遺構である SX01、02、03 は、近接している状況にあり、主軸方向がほぼ同じ方向である。新旧関係は、SX01、02、03 の順で構築されていることが確認できた。SX01 は、川原石を葺いた基壇が構築され、地表面の石組と地下に骨片が出土した土壙が認められた。SX02 は、SX01 の裾部を一部、覆う状況で川原石のみで構築した基壇状遺構である。SX03 は、SX02 を完全に埋没させ、さらに SX01 の北東側を埋めて基壇状遺構を構築したものとみられる。五輪塔の空風輪片が出土しており、SX02 の基壇状遺構には、かつて五輪塔などがあった可能性が考えられる。SX03 は、板碑を埋設する面において SK01 も同一面に構築されており、SK01 は SX03 に伴う遺構であり、形状より土壙の可能性について指摘できる。

中世における遺構の時期は、SD01 の構築時期が14世紀～15世紀代を下限とし、SX01 が14世紀～16世紀前半、SX03 が大永八（1528）年に構築されたと時期比定する。川原石を敷き詰めた基壇状遺構である SX01 に類似する事例は、菊池市泗水住吉（飛熊）虚空蔵菩薩堂の板碑、大津町摩利支天堂の板碑群や無動寺跡の板碑、山都町華藏寺板碑群などが挙げられる。

合志氏が竹迫城に拠点を住吉から移す時期は、「肥後国誌」に永正七（1510）年とみられる。板碑（SX03）には、大永八（1528）年、大林大和守岑徳とあり、合志氏の家臣であった大林氏が城下に住んでいた可能性があり、合志氏が竹迫城へ入城した時期を考える上で貴重な資料である。竹迫城絵図の国泰寺跡に「今寺中二觀音ノ具仏有り国泰寺ノ本尊ノヨシ云傳フ国タイ寺ハ竹迫氏ノ位牌処力」と記述があり、今回の調査で確認された墓所は、竹迫氏に関係した菩提寺であった可能性がある。この大永八（1528）年と同年に「肥後国誌」には、竹迫日吉神社において合志隆岑が再興をしたと記した棟札の記述がある。また「国郡一統志」には、竹迫日吉神社について「上社者、後土御門院文明九年（1477）六月日 有天怪事 汚乎社壇因茲改地洛人大進法眼新造神像匠氏修理亮經營神殿」との記述がみられる。大進法眼は、13世紀末から九州で活躍する仏師猪熊一門と考えられ、古代から中世にかけて都などで活躍した「印派仏師」との関連も注目されている。註 1)



第31図 遺跡周辺図

本遺跡は、天文期以前の時期において国泰寺の敷地に竹迫氏の関連した墓所が造営され、天文期に合志氏の家臣である大林氏の板碑が構築されたと推測する。旧領主の墓所を継続する事例は、八代市古麓城跡の墓所発掘調査において名和氏もしくは在地有力者層から相良氏の時期における在地有力者層へ変わると推測されているが県内では不明な点が多い。

今回の調査で確認された遺構は、寺院に関わる建物跡は確認できなかったことから、寺域に存在した墓所として位置付けられる。本遺跡の周辺には、陣ノ内遺跡で確認された清寿院跡に関連する遺構、竹迫日吉神社、原口新城跡の一郭に存在した寺院に関連した遺構などを今後、検証していく作業も重要である。応永年間（1394～1402）に肥前萬歳寺（臨済宗南禅寺派）を開山した以亨得兼は、見心来復の法嗣で臨済禪の二十一世として肥後国泰寺を開山したとされている。註2) 肥後において国泰寺は、本遺跡のみに限られるが史料的な評価が必要であり、これ以外の資料がないため以亨得兼が開山することは難しいものの、ここに記しておきたい。「肥後国誌」では、竹迫五山跡の1つとして「国泰寺」と記述があるが不明な点も多い。今後、史料や神仏像などの調査も含め進めていくことで、中世竹迫における歴史が復原できることに期したい。

註

註1) 文明九年（1477）の記述から竹迫日吉神社が存在していたことが窺える。

註2) 荻須純道 1965 「日本中世禪宗史」 木耳社においては大冥團和尚の「本朝傳來宗門略列祖傳」（文化五年）を根拠としている。

参考文献

- 原口城跡 1984 合志町埋蔵文化財調査報告書1 合志町教育委員会
井手誠之輔 1986 「萬歳寺の見心来復像考」 美術史119 美術史學会
合志町史編纂協議会 1988 「合志町史」 合志町
大津町史編纂委員会編 1988 「大津町史」 大津町
有木芳隆 1998 「熊本市・岫雲院の木造如意輪觀音坐像と猪熊仏師について」「市史編纂だより」 新熊本市史編纂委員会
藤本貴仁 2000 「宇土城跡（西岡台）Ⅲ」 宇土市埋蔵文化財報告書 宇土市教育委員会
坂田和弘 2005 「古麓城跡」 熊本県文化財調査報告書 227 熊本県教育委員会
米村大 2007 「陣ノ内遺跡」 熊本県合志市文化財調査報告第1集
九州山岳靈場遺跡研究会、九州歴史史料館編 2018 「肥後の山岳靈場遺跡 池辺寺と阿蘇山を中心に 資料集」
池田朋生 2018 「熊本北部における中世墓終焉期の様相 - 阿蘇氏関連墓所の調査報告 -」
「九州地域の中世墓終焉期を探る」第10回中世葬送墓制研究会資料 中世葬送墓制研究会

第2表 土器観察表

排図番号	遺物番号	図版番号	出土地点・取上番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色調		調整		焼成	胎土	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
9	1	10	SK04	縄文土器	深鉢	胴部1/3			23.0+	にぶい黄橙(10YR6/3) 褐灰(10YR4/1)	ナデ	ナデ	良好	角閃石 雪母 長石	最大胴部径36cm 縄文晚期 黒川式?		
10	2		SK06	弥生土器	壺?	肩部の一部			5.1+	黒褐(10YR3/1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ハケメ 刻み目突帯 ナデ	ハケメ	良好	雪母 長石 石英		
10	3		SD02 サブトレス層	縄文土器	浅鉢	リボン状突起の一部			3.3+	淡黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ミガキ ナデ	ミガキ	良好	雪母 石英	黒色磨研土器	
10	4		SD02 東北下層	弥生土器	壺	口縁破片			5.0+	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ヨコナデ 縦方向のハケメ 後ナデ	ヨコナデ 斜め方向のハケメ 後ナデ	良好	~1mm砂粒 角閃石 雪母 長石	弥生時代後期	
10	5		SD02 東北下層	弥生土器	壺	口縁の一部			5.3+	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	ヨコナデ ハケメ後ナデ	ヨコナデ ナデ	良好	角閃石 雪母	弥生時代後期	
10	6		SD02上層	弥生土器	壺	底部1/4	(4.4)		5.2+	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	指頭圧痕後ナデ ケズリ	ヘラナデ ナデ	良好	~1mm砂粒 石英 長石 雪母	残りが少ないため詳細は不明 弥生時代後期	
10	7		SD02上層	弥生土器	高坏	坏部1/4	(16.6)		4.4+	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ 中心から口縁部に向かって放射状にヘラミガキ	良好	雪母 角閃石	弥生時代後期後半	
10	8		SD02 下層	弥生土器	鉢	口縁1/5	(11.9)		9.5+	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	ナデ 縦及び斜め方向ハケメ 後ナデ	ナデ 斜め方向ハケメ後 軽くナデ	良好	~1mm砂粒 石英 雪母	弥生時代後期後半 脚付の可能性もある	
11	11		SI01	弥生土器	壺の底部	底部2/3		(5.1)	8.7+	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR6/3)	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	良好	雪母 石英 長石 ~ 1mm砂粒	弥生時代後期後半	
11	12		SI01	土師器?	高坏及び 蓋型土器	脚の一部			5.4+	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ヨコ及び斜め方向のナデ 後放射状にヘラミガキ ナデ ケズリ	ナデ	良好	雪母 長石	裾部に4か所穿孔を施す 低脚高坏 柳原Ⅲ期?	
11	13	10	SI01(No.24) SI01	弥生土器	高坏	全体の3/4	(25.2)	(20.9)	21.0	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	ナデ ハケメ ヨコナデ ハケメ後ナデ	ナデ ハケメ	良好	長石 石英 雪母	弥生時代後期 脚の付け根が赤帯? 状になる	
11	14		SI01(A2G)	弥生土器	壺	脚の1/3			5.9+	橙(7.5YR6/6)	灰黄褐(10YR5/2)	ナデ	ナデ	良好	石英 角閃石 長石	弥生時代後期	
11	15	10	SI01(A3G)	弥生土器	壺	脚部~脚部		10.6	15.4+	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	黒褐(10YR3/2)	ハケメ ヨコナデ ナデ	ハケメ ナデ	良好	石英 角閃石 長石 ~1mm砂粒	脚台の上壺 弥生時代 後期後半 実測番号26と 同一の可能性あり	
11	16		SI01(A3G)	不明	底部	底部のみ			3.4+	にぶい黄橙(10YR6/4)	明黄褐(10YR7/6)	表面剥離のため不明	ナデ	良好	石英 角閃石 長石	内外共器面荒れたの ため詳細は不明	
14	19		SD01 SI01(No.23)	弥生土器	壺	口縁~胴部	(20.3)		20.5+	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	ナデ ハケメ	ハケメ	良好	雪母 角閃石	弥生時代後期後半 実 測番号20と同一の可能 性あり 燐付着	
14	20		SD01	土師器	高台付坏	体部~底部 破片			1.8+	にぶい黄橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	回転ナデ 後横方向のヘラ ミガキ	不定方向のヘラミガキ	良好	~1mm砂粒 赤褐色粒 雪母	口縁部欠損 回転台土 師器 古代	
14	21		SD01	土師器	高台付坏	全体の1/3	(10.6)		1.5+	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ヘラ切り 後 ナデ	不定方向のヘラミガキ ナデ	良好	~1mm砂粒 雪母 角 閃石 長石	口縁部欠損 回転台土 師器 古代	
14	22		SD01	土師器	高台付坏	底部1/5		(7.2)	2.0+	にぶい黄橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(7.5YR7/6)	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	良好	~1mm砂粒 雪母 角 閃石 石英	口縁部欠損 回転台土 師器 古代	
14	23		SD01 北西側上層	弥生土器?	高坏	体部1/3			2.7+	にぶい黄橙(10YR7/3) 赤影:赤(10R5/8)	にぶい黄橙(10YR6/4) 赤影:赤(10R5/8)	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	良好	石英 角閃石 雪母	口縁部欠損 脚部外面に 赤影	
14	24		SD01 南側上層	須恵器	壺	底部1/4~ 胴部		(8.4)	7.2+	褐灰(10YR4/1)	黒褐(10YR3/2)	沈線 ナデ ケズリ後ナデ 自然釉	ナデ	良好	長石 ~1mm砂粒	口縁部欠損 脚部外面に 自然と二つの沈線 古代	
14	25		SD01北西側	須恵器	壺及び壺	底部破片			7.6+	灰白(2.5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/1)	タキ	おさえ後ナデ	良好	~1mm砂粒 白色粒子	体部外面にタキ目	
14	26	8	SD01上層	土師器	小皿	全体の1/2	(8.0)	(6.2)	1.5+	橙(5YR7/6)	にぶい黄橙(5YR7/4)	回転ナデ 回転糸切り後 ヘラナデ	回転ナデ ナデ	良好	石英 長石	13世紀前半~13世紀後 半	
14	27		SD01北西側	土師器	小皿	破片			1.4+	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)	回転ナデ 回転糸切り	ナデ	良好	雪母 角閃石	13世紀前半~13世紀後 半	
14	28	8	SD01 南側下層	土師器	小皿	全体の1/2	(7.7)	(6.7)	1.55	淡黄橙(7.5YR8/4)	淡黄橙(7.5YR8/3)	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ ナデ	良好	長石 赤褐色粒 ~1 mm砂粒	口縁部欠損 脚部外面に 自然と二つの沈線 古代	
14	29		SD01 南側上層	土師器	小皿	全体の2/3			5.5	1.2+	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	ナデ 回転糸切り後板状 底	回転ナデ ナデ	良好	~1mm砂粒 白色粒子	口縁部欠損 13世紀前 半~13世紀後半
14	30	8	SD01	土師器	小皿	全体の1/3	(8.5)	(7.8)	1.4+	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	回転ナデ 回転糸切り後 板状底	回転ナデ ナデ	良好	~1mm砂粒 白色粒子 雪母	13世紀前半~13世紀後 半	
14	31	8	SD01上層	土師器	小皿	全体の2/3	8.3	6.8	1.8+	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	ナデ 回転ナデ 回転糸 切り	回転ナデ ナデ	良好	~1mm砂粒 角閃石 赤褐色粒	13世紀前半~13世紀後 半	
14	32	8	SD01 南側上層	土師器	坏	全体の2/3	12.8	9.1	3.6	にぶい黄橙(5YR7/4)	にぶい黄橙(5YR7/4)	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ ナデ	良好	角閃石 ~1mm砂粒	13世紀前半~13世紀後 半	
14	33	8	SD01 北側上層	土師器	坏	全体の3/4	13.0	8.9	3.5	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	回転ナデ 回転糸切り ナデ	回転ナデ ナデ	良好	赤褐色粒 角閃石 ~1mm砂粒	13世紀前半~13世紀後 半	
14	34	8	SD01最下層	土師器	坏	全体の1/2	(13.2)	9.7	3.1+	にぶい黄橙(5YR7/4)	にぶい黄橙(5YR7/4)	回転ナデ 後ナデ 回転糸 切り 板状底	回転ナデ 後ナデ	良好	~1mm砂粒 赤褐色粒	13世紀前半~13世紀後 半	
14	35	8	SD01 南側上層	土師器	坏	全体の2/3	13.0	9.2	3.3	にぶい黄橙(7.5YR7/3)	淡橙(5YR7/4)	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ ナデ	良好	角閃石 ~1mm 砂粒	13世紀前半~13世紀後 半	
14	36	8	SD01 南側上層	土師器	坏	全体の1/3	(13.0)	(9.1)	3.1+	にぶい黄橙(5YR7/4)	にぶい黄橙(5YR7/4)	回転ナデ 回転糸切り後 板状底	回転ナデ ナデ	良好	角閃石 雪母 ~1mm 砂粒	13世紀前半~13世紀後 半	
14	37		SD01	土師器	坏	全体の1/5	(13.3)		2.9+	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	回転ナデ 回転糸切り後 板状底	回転ナデ ナデ	良好	角閃石 雪母 長石	13世紀前半~13世紀後 半	
15	38		SD01 南側上層	土師器	坏	底部1/2		(8.6)	1.4+	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR6/2)	回転ナデ 回転糸切り後 板状底	回転ナデ ナデ	良好	~1mm砂粒 赤褐色粒	口縁部欠損 見込み中 心に薄く煤付着 煙 明皿として使用か?	
15	39		SD01 南側上層	土師器	坏	底部1/5		(8.6)	2.9+	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転糸切り	良好	角閃石 雪母 ~1mm 砂粒	見込み中 心に薄く煤付着 煙 明皿として使用か?	
15	40		SD01 南側上層	土師器	坏	破片			2.7+	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	回転ナデ 回転糸切り後 板状底	回転ナデ ナデ	良好	~1mm砂粒		
15	41		SD01 南側下層	土師器	坏?	底部の一部			1.1+	明赤褐(5YR5/8)	明赤褐(5YR5/6)	ナデ 回転糸切り	ナデ	良好	雪母 長石	口縁部欠損	
15	42		SD01上層	土師器	坏	底部1/4			1.3+	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	回転ナデ 回転糸切り後 板状底	ナデ	良好	~1mm砂粒 雪母 角 閃石	口縁部欠損	
15	43		SD01北西側	須恵器	片口鉢	片口の一部			2.5+	灰(5N7/)	褐灰(10YR6/1)	回転ナデ ナデ	ナデ	良好	雪母 長石	束縛系	
15	44	8	SD01 南側上層	須恵器	壺?	口縁破片			3.8+	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	回転ナデ ナデ	回転ナデ 後ナデ	良好	~1mm砂粒	束縛系	
21	53		SK01	土師器	小皿	破片	(8.4)	(6.5)	2.2+	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	良好	~1mm砂粒 角閃石 長石	2枚の小皿が溶着した状 態 13世紀前半~13世 紀後半	
21	54		SK02上層	土師器	小皿	全体の1/4	(7.2)	(5.4)	1.6+	にぶい黄橙(7.5YR7/3)	にぶい黄橙(7.5YR7/3)	ナデ 回転ナデ 板状底	ナデ 回転ナデ	良好	~1mm砂粒 雪母 角 閃石 赤褐色粒	13世紀前半~13世紀後 半	
21	55		SK02上層	土師器	小皿	底部1/3		(7.2)	1.2+	にぶい黄橙(7.5YR7/3)	明黄褐(7.5YR7/2)	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ ナデ	良好	角閃石 雪母 長石	口縁部欠損	
21	56		SK02下層 (No.16)	土師器	坏	底部2/3		(7.2)	2.2+	淡黄橙(7.5YR8/4)	淡黄橙(7.5YR8/4)	回転ナデ 後ナデ 回転糸 切り	回転ナデ ナデ	良好	~1mm砂粒 赤褐色粒	口縁部欠損	
21	57		SK02下層 (No.16)	土師器	坏	ほぼ完形	12.1	6.8	3.0+	淡黄橙(7.5YR8/4)	淡黄橙(7.5YR8/3)	ナデ 回転ナデ 回転糸 切り	ナデ 回転ナデ	良好	角閃石 雪母 長石	口縁に歪あり 14世紀以降?	
21	58		SK02上層	土師器	坏	全体の1/3	(10.3)	(7.5)	2.0+	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	回転ナデ ナデ 回転糸 切り	ナデ 回転ナデ	良好	~1mm砂粒 角閃石 赤褐色粒	14世紀以降?	
22	62		SX01 2区	土師器	壺	口縁の一部			4.1+	黒褐(5YR3/1)	黒褐(5YR3/1)	ナデ 指頭圧痕	ナデ ハケメ	良好	雪母 石英		
22	63		C3G SX01 (No.11)	須恵器	壺及び壺	胴部の一部			5.9+	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR4/1)	タキ	ナデ	良好	角閃石 雪母	体部外面にタキ目	
22	64		C3G SX01 1区(No.10)	瓦質土器	火鉢	脚の一部			9.8+	暗灰(5N3/)	暗灰(5N3/)	ナデ	ナデ	良好	長石 雪母		
22	65		C3G SX01 2区(No.12)	瓦質土器	火鉢	脚の一部			8.0+	暗灰(5N3/)	暗灰(5N3/)	ナデ	ナデ	良好	長石 角閃石		
22	66		SX01中央	瓦質土器	擂鉢	口縁の一部			3.8+	暗灰(5N3/)	暗灰(5N3/)	ナデ	スリメ	良好	雪母 長石		

第2表 土器観察表

捕団番号	遺物番号	図版番号	出土地点・取上番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色調		調整		焼成	胎土	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
28	71	SK08	4層	縄文土器	浅鉢	破片			2.8+	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR5/1)	ミガキ 突蒂	ナデ ミガキ	良好	角閃石 長石 ~1mm 砂粒	突帯に二枚貝の押圧を施す。黒色磨研、後期~晚期傾きは正確ではない御領式?
28	72	SK09	瓦質土器	擂鉢	口縁破片			4.9+	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	ヨコナデ ナデ	ナデ シリメ ハケ調整	良好	石 石 ~1mm砂粒 雲母 長		
28	73	SK09	瓦質土器	擂鉢	胴部破片			7.7+	灰黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR5/3)	指頭圧痕ナデ	シリメ	良好	石 石 ~1mm砂粒 雲母 長		
28	74	SP13	弥生土器	鉢or高杯	口縁1/3	(18.6)		6.6+	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/4)	ヨコナデ ハケメ 斜め方 向ハケメ後ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	良好	石 角閃石 ~1mm砂粒 雲母 長	外縁磨着 弥生時代後期	
28	75	SP01	土師器	小皿	全体の1/3		(4.5)	1.1+	淡黄褐(7.5YR8/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナデ 回転系切り	ナデ 回転ナデ	良好	石 ~1mm砂粒 赤褐色粒		
29	77		土師器	臺	口縁1/8	(20.0)		6.2+	褐灰(10YR4/1)	にぶい褐(7.5YR5/4)	ヨコナデ 縦方向のハケメ 後ナデ	ヨコナデ ナデ	良好	長石 雲母 石英		
29	78		土師器	高杯	脚部1/4		(14.8)	9.05+	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	やや器面荒れ 回転ナデ 後継及び斜め方向のナデ	斜め方向のナデ ヨコナデ	良好	長石 雲母	外縁脚部の付け根に赤 色鉱物がわざかに残る	
29	79	B2G I層	瓦質土器	火鉢	底部1/5			3.4+	灰褐(7.5YR4/2)	にぶい褐(7.5YR5/4)	ナデ ケズリ後ナデ	ハケ調整	良好	~1mm砂粒 赤褐色粒	口縁部から脚部は欠損	
29	80	C3G	土師器	小皿	全体の1/5	(6.8)	(5.6)	1.3+	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	ナデ 回転系切り 回転ナ デ	ナデ 回転ナデ	良好	~1mm砂粒 赤褐色粒	13世紀前半~13世紀後 半	

第3表 陶磁器観察表

捕団番号	遺物番号	図版番号	出土地点・取上番号	器種	器形	残存度	法量(cm)			色調		調整		焼成	胎土	備考		
							口径	底径	高台高	高台径	器高	外面	内面	外面	内面			
15	45	8	SD01	白磁	碗	口縁1/7	(17.0)			3.6+	オイスター (5Y7.5/1.0)	オイスター (5Y7.5/1.0)	釉は薄く均等に掛かる やや気泡が多い	釉は薄く均等に掛かる やや気泡が多い	良好	薄い灰白色 やや良質	口縁部に肉厚の玉縁を持つ	
15	46	8	SD01 南東側 最下層	青磁	碗	口縁部 ~体部			4.3+	ブロンズ (5Y4.0/5.5)	ブロンズ (5Y4.0/5.5)	釉は薄く均等に掛かる透 明感はない わずかに気泡が入る	釉は薄く均等に掛かる透 明感はない わずかに気泡が入る	良好	黄灰色 やや良質	外縁に片切り彫りによる 大きな蓮弁文を施す 上田氏分類の青磁碗B 類14世後半~15世中頃		
15	47	8	SD01南側	青磁	碗	高台部		0.8	6.4	2.5+	裏葉色(3G7.0/2.0)	裏葉色(3G7.0/2.0)	全面施釉後高台置付けの 一部と高台内の袖を剥ぎ 取る	釉は薄く均等に掛かる透 明感はない	良好	灰白色 やや良質	高台は低い 高台内の露 胎部は茶褐色に変色する	
15	48	8	SD01 南側下層	青磁	碗	高台部		0.8	6.4	2.3+	露胎部分 油色(5Y6.0/6.0)	釉薬 ブロンズ (5Y4.0/5.5)	釉は半透明で高台外まで 掛かり貢入が入る 高台 裏付けから高台内に露胎 となる	見込み部分の釉は半透 明で貢入が入る	良好	黄灰色 やや良質	高台裏付けと高台内は 釉がわざかに付着する	
21	59		SK02南西	白磁	皿	口縁破片			1.2+	パールホワイト (N8.5)	パールホワイト (N8.5)	施釉 やや気泡が多い	施釉 やや気泡が多い	良好	白色 やや良質	口縁部は外板する 外縁に細かな入あり		
22	67		SX01 トコウ中央	白磁	碗	口縁1/5	(17.0)		3.0+	オイスター (5Y7.5/1.0)	オイスター (5Y7.5/1.0)	釉は薄く均等に掛かる 透明感がある	釉は薄く均等に掛かる 透明感がある	良好	薄い灰白色 やや良質	口縁部に肉厚の玉縁を持つ		
29	81		C1・2G I層	青磁	碗	口縁破片			3.1+	ミストグリーン (3G7.5/2.0)	ミストグリーン (3G7.5/2.0)	釉は薄く均等に掛かる 半透明で貢入が入る	釉は薄く均等に掛かる 半透明で貢入が入る	良好	灰白色 組質			
29	82		C2G	青磁	碗	口縁1/8	(12.2)		2.5+	ミストグリーン (3G7.5/2.0)	ミストグリーン (3G7.5/2.0)	釉はガラス質で透明感が ある 貢入が入る	釉はガラス質で透明感が ある 貢入が入る	良好	灰白色 やや良質	外面に片切り彫りの幅の 狭い蓮弁文を施す 上田氏分類の青磁碗B 類1V類前後		
29	83		西壁	青磁	碗	高台のみ		0.9	(6.4)	2.0+	モスクグリーン (3G5.5/5.5)	モスクグリーン (3G5.5/5.5)	釉はガラス質で透明感が ある 貢入が入る	釉はガラス質で透明感が ある 貢入が入る	良好	灰白色 組質	高台裏付けから高台内 の釉を剥ぐ 露胎部分はに はい褐色に変色する	
29	84		A・B2G I層	青磁	碗	破片		1.1	(6.2)	3.4+	ミストグリーン (3G7.5/2.0)	ミストグリーン (3G7.5/2.0)	釉はガラス質で透明感が ある 貢入が入る	釉はガラス質で透明感が ある 貢入が入る	良好	薄い灰白色 やや良質	高台はやや高めになる 釉は高台裏付けを超える	
29	85		C4G	青磁	碗	底部1/8	(7.3)	1.1	(6.9)	3.2+	オリーブグリーン (3GY3.5/5.0)	オリーブグリーン (3GY3.5/5.0)	釉はガラス質で透明感は ない 高台裏付けと高台 内側の袖を剥ぐ 露胎部 分は橙色となる	釉はガラス質で透明感は ない	良好	灰白色 やや良質	やや高め角高台で高台 外縁を剥ぐ面に取り付ける	
29	86		C1・2G II層	染付	碗	口縁破片			2.9+	ブルーウォッシュ (3PB8.5/1.0)	ブルーウォッシュ (3PB8.5/1.0)	釉は薄く均等に掛かる	釉は薄く均等に掛かる	良好	白色 良質	体部外面に界線と草花 文		
29	87			染付	碗	底部1/4	(4.4)		2.1+	リリーホワイト (3G9.0/1.0)	フロステイクレイ (3G7.5/1.0)	釉は薄く均等に掛かる	釉は薄く均等に掛かる	良好	薄い灰白色 やや良質	高台内に銘と界線 高台外と体部下位に界 線近世		
29	88		A・B2G	染付	皿	全体の1/6	(13.1)		0.5	(6.5)	2.8	ページュ (BYR7.5/2.0)	ページュ (BYR7.5/2.0)	釉は薄く均等に掛かる 見込みは蛇の目袖剥ぎ	釉は薄く均等に掛かる 見込み部分に文様	良好	にぶい褐色 やや良質	体部内面と見込み部分 に文様 近世
29	89		C-D3・4G	陶器	縁台	完形	4.9	3.7		4.5	釉薬 黒柿 (4R2.0/1.5)	釉薬 黒柿 (4R2.0/1.5)	施釉 回転ナデ ケズリ 回転ヘラギリ	施釉	良好	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	近世	

第4表 石器観察表

捕図番号	遺物番号	図版番号	出土地点・取上番号	器種	残存度	石材	法量(cm·g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
10	9	9	SD02下層	磨製石斧	基部欠損	蛇紋岩	7.5+	6.2	2.6	151.0+	平面形は撥形を呈すると考えられる。表面は甲が高く、裏面は平面的である。剥離面は一部残るが、丁寧な研磨が施されている。
11	17	9	SI01No.21	石包丁	両端部欠損	頁岩	4.5+	4.6+	0.75+	17.13+	裏面は剥離面を大きく残し、穿孔部の重複が見られ、破損による再加工が行われたと考えられる。
11	18		SI01	スクレイバー	完形	チャート	4.0	2.1	1.55	11.23	厚手の縦長剥片を素材として左側縁に刃部調整を施す。また、右側縁の一部と下部に使用痕と思われる微細剥離が見られる。
15	49	9	SD01西側壁トレンチ	磨製石斧	完形	蛇紋岩	6.45	3.45	1.35	41.45	平面形が撥形を呈する小型の石斧である。両側縁は剥離面が残り基部に敲打痕が見られる。
15	50		SD01南東側	砥石	完形	流紋岩(天草砥石)	11.2	5.4	2.3	215.0	板状の砥石である。表面、裏面、両側面に全面的な使用痕があり、右側に溝状の擦痕が集中する。上面、下面是未調整であるが一部に使用による擦痕が残る。左側面は整形時の擦痕が残る。
29	90	9	調査区西壁面	打製石斧	完形	緑色片岩	12.10	4.90	1.35	100.0	裏面の刃部近くに摩耗による擦痕、光沢が見られる。基部は左右対称で欠損後に再加工が行われたと考えられる。
29	91	9	調査区一括	太形蛤刃石斧	先端・基部を欠損	玄武岩?	10.40+	6.80+	5.00	483.0	右側縁に剥離面が残り、部分的に敲打痕が見られる。裏面の擦痕は新しい傷が多く不明瞭である。表面は中央部に敲打痕の集中と炭化物の付着があり、敲石に転用されたと考えられる。
30	92	9	C・D3・4G I層 No.1	石包丁	右側、左端部欠損	頁岩	3.9+	7.6+	0.65+	25.6+	刃部は使用痕と思われる微細剥離が集中する。裏面の欠損面は摩耗による光沢が見られることから欠損後も使用されたと考えられる。
30	93		西南壁面VI層	石錐	先端部を若干欠損	チャート	3.6+	1.15	0.40	1.33+	縦長剥片を素材として打面を切断後両側縁より二次加工を施す。基部は二次加工が縁辺のみで素材面が残る。

* +は残存値

第5表 石造物観察表

捕図番号	遺物番号	図版番号	出土地点・取上番号	器種	残存度	石材	法量(cm·g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
27	70		SX03前	水盤	口縁一部と下部を欠損	阿蘇溶結凝灰岩	31.3	30.15	16.7	11.6+	内面はツルハシ状の工具痕が残る。また外面上に一部工具痕が残る。
30	94		B3G I層 (No.5)	空風輪	全体の1/6	阿蘇溶結凝灰岩	15.7+	11.1+	5.6+	0.55+	欠損部分は多いが、表面の加工は丁寧で滑らか且直線的な工具痕が見られる。空風輪のうち、風輪の一部のみ残存する。

* +は残存値

第6表 鉄製品・銅錢観察表

捕図番号	遺物番号	図版番号	出土地点・取上番号	種別	法量(cm·g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
10	10		SD02(B1G)	鉄鎌	4.6+	2.2+	0.1+	3.88	
15	51	9	SD01南西トレンチ	銅錢	2.6	2.6	0.2	1.61	宋銭(元豐通宝)
15	52	9	SD01	銅錢	2.45	2.5	0.15	2.73	宋銭(熙寧通宝)
21	60		SK02南東トレンチ	鉄滓	3.9	4.7	2.1	40.88	
21	61		SK02東南壁 (No.8)	鉄釘?	5.5	0.25	0.4	3.27	
22	68		C3G SX01 1区(No.9)	鉄滓	4.5	5.6	3.5	102.50	左側壁に植物繊維の付着あり
22	69	9	SX01	銅錢	2.1+	2.4+	0.15	1.87	明銭(洪武通宝)
28	76		SK05	鉄釘? (穿孔具?)	3.4	1.4	0.3	6.24	断面の厚さが極端に異なるため別個体か?
30	95		トレンチ1 (No.15)	鉄釘	7.4	1.15	1.15	14.55	
30	96		南西壁IV層	鉄釘	7.15+	1.15	0.7	11.17	
30	97		表探	鉄釘	5.9+	0.5	0.6	6.95	
30	98		C2G	キセル?	2.1+	1.1	1.1	2.95	上部から下部へ約2/3の位置まで空洞あり。

* +は残存値